

2024年度

次世代人材育成事業

『多文化共生×SDGs×開発教育』連続セミナー

実績報告書



《主催》 公益財団法人 滋賀県国際協会

《協力》 国際教育研究会 Glocal net Shiga

《後援》 滋賀県、滋賀県教育委員会、JICA関西、滋賀県高等学校国際教育研究協議会、滋賀県青年海外協力協会

目 次

目 次	1P
事業概要、参加者について	2・3P
各回セミナーの報告	4～42P
グループ発表（各グループのスライド）	43～50P
事後アンケートまとめ	
●今年度修了生	51～56P
●2022・2023年度修了生	57～62P
あとがき	63P

2024年度次世代人材育成事業 『多文化共生×SDGs×開発教育』連続セミナー

(公財) 滋賀県国際協会は、世界と自分とのつながりや私たちが暮らす地域について再認識することで、持続可能な社会づくりや地域の活性化に向けて、実際に行動できる人材の育成をめざした連続セミナーを開催しました。

【プログラムの概要】

連続セミナー6回・オプション企画（希望者のみ）3回実施

日程・会場	内 容
第1回 7月21日(日) ピアザ淡海（大津市）	オリエンテーション 本セミナー、在住外国人の状況についての説明など 参加者同士の新たな出会い 開発教育についてミニ講義、ワークショップ体験など
<オプション企画 ①> 7月28日(日) オンライン事前レク	日本ラチーノ学院について 日本ラチーノ学院の沿革、事前質問に対する学校側の回答の共有など
第2回 8月6日(火) 日本ラチーノ学院（東近江市）	ブラジル人学校の生徒との出会い 異文化理解ゲーム「バファバファ」、日系生徒によるファミリーヒストリーの発表など
<オプション企画 ②> 9月14日(土) 金田コミュニティセンター（近江八幡市）	学習支援教室訪問 学習支援教室「ワールドアミーゴクラブ（WAC）」の見学
第3回 9月28日(土) ピアザ淡海（大津市）	日本で子育てする外国人保護者との出会い 【午前】講演「日本に暮らす外国人が抱えている課題～五つの壁を乗り越えて～」 《講師》(特活)外国人女性の会パルヨン 代表 ハッカライネン ニーナさん 【午後】日本で子育てする外国人保護者との交流
第4回 10月19日(土) 神戸市内	さまざまな宗教との出会い 神戸スタディツアー 神戸ムスリムモスク、海外移住と文化の交流センター、シナゴーク、ジャイナ教寺院、シク教寺院、兵庫マスジット Jan Academy 訪問
<オプション企画 ③> 11月10日(日) モスク アンヌール能登川（東近江市）	県内モスク訪問 礼拝見学後、宗教的価値観、日本での暮らしなどについてフリートーク
第5回 11月16日(土) 【午前】渡来人歴史館（大津市） 【午後】滋賀朝鮮初級学校（大津市） ピアザ淡海（大津市）	日本に根付く朝鮮半島の歴史と今との出会い 【午前】渡来人歴史館 専門員によるガイドツアー 【午後】滋賀朝鮮初級学校 授業見学 & フリートーク、全体共有ふりかえり
第6回 12月14日(土) ピアザ淡海（大津市）	多文化共生に関する講演および受講生による発表会 講演「危機の中の『多文化共生』」 《講師》元NHKアメリカ総局長 脇田 哲志 さん 連続セミナーでの学びから、今後のアクションプランを発表しよう！

【参加者について】

- 県内の高校生、大学生、教員を含む社会人 21人が受講（うち、18人が修了）。
 受講生の中には、海外日本人学校勤務経験者、海外留学経験者を含む。
- 滋賀県国際交流員（ブラジル、アメリカ出身）、県内の留学生（インドネシア、中国出身）、JICA海外協力隊経験者、昨年度の修了生など延べ16人がサポーターとして協力。

参加者名簿

【受講生（修了生）】

	名 前			名 前	
1	雲出 旬由	人権・福祉交流会館職員（教員）	10	寺井 詩織	小学校教員
2	浅野 翔	社会福祉法人職員	11	新谷 美晴	大学生
3	中谷 陽輔	小学校教員	12	奥西 一生	大学生
4	中谷 和恵	幼稚園教員	13	坂巻 唯花	高校生
5	山本 祥也	大学生	14	中川 穂乃花	高校生
6	村尾 紅美	高校生	15	玉井 隆至	小学校教員
7	石野 沙恵	小学校教員	16	平居 ひのわ	高校生
8	福山 太陽	大学生	17	川田 真子	高校生
9	南井 萌果	大学生	18	平尾 太一	大学生

【サポーター】

	名 前	所 属 等
1	ジエゴ デ ソウザ	滋賀県国際交流員（CIR）ブラジル
2	クリストファー ブリッキー	滋賀県国際交流員（CIR）アメリカ
3	森川 真秀	JICA滋賀デスク（元ベリーズ隊員）
4	福西 真実	JICA奈良デスク（元インド隊員）
5	ウィリー アンドレアン ウィジャヤ	びわこ奨学生 龍谷大学生（インドネシア）
6	バイガーリー	びわこ奨学生 滋賀県立大学生（中国）
7	宮平 ビアンカ	彦根市ポルトガル語支援員
8	水津 シンチア	彦根市ポルトガル語支援員
9	脇田 哲志	第6回講師 元NHKアメリカ総局長
10	小寺 真代	県内私立高校職員

*「びわこ奨学生」…当協会外国人留学生奨学金支給制度「びわこ奨学金」を受給する留学生
上記の他、一昨年・昨年度修了生がサポーター兼参加者として参加

【ファシリテーター】

担 当 回	名 前	所 属 等
第1回・第2回	大槻 一彦	国際教育研究会 Glocal net Shiga
第1回	成田 実幸	国際教育研究会 Glocal net Shiga 2022年度本セミナー修了生
第2回	竹辺 このみ	国際教育研究会 Glocal net Shiga 2022年度本セミナー修了生
第3回・第5回	川辺 純子	国際教育研究会 Glocal net Shiga
第4回	久保 哲成	神戸学院大学非常勤講師
オプション③	岡 佑里子	国際教育研究会 Glocal net Shiga

各回セミナーの報告

受講生による記録を基に編集しています。

第1回 「参加者同士の新たな出会い」

オリエンテーション、在留外国人の現状についての説明、受講生による自己紹介のあと、ワークショップ体験を行った。

【開催日】2024年7月21日（日）

【参加者数】受講生：16人 サポーター：10人

【会場】ピアザ淡海（大津市）

【ファシリテーター】

○オリエンテーション、在留外国人の現状説明（（公財）滋賀県国際協会 大森 容子さん）

○ワークショップ体験（国際教育研究会 Glocal net Shiga 大槻 一彦さん、セミナー修了生 成田 実幸さん）

≪午前≫

（1）オリエンテーション 参加者自己紹介

留学帰りの高校生や留学生を含む大学生、学校の教員や人権関係の仕事をしている社会人など、多種多様な立場や経歴をもった受講生やサポーターが参加し、和やかな雰囲気での研修がスタートした。



（2）在日外国人の現状について

年間90日以上日本にいる在留外国人の数は2023年末の法務省の統計では約340万人で、前年度と比較すると約45万人増加している。来日の背景には経済格差や自国の不安定な状況などの様々な理由があるが、概して安心・安全、よりよい生活を求めて来日されているということである。滋賀県においてはベトナムやブラジル、中国から来日している人が多いが、未就学児の人数でいうとベトナムやネパー

ル、インドネシアなどからの人数が顕著に増加している傾向がある。外国にルーツをもつ子どもたちは、日本でも母国でも外国人扱いをされるという生き辛さもあり、アイデンティティーの形成にも影響しているという事実がある。混沌とする世界情勢を考えると、今後も来日される外国人の数は増え続けることが予想されていて、多文化共生についての理解や行動変容が一層求められる。

多文化共生社会

多文化共生とは、国籍や民族などの異なる人々が互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら地域社会の構成員として共に生きていくことである。そんな多文化共生社会を築いていくためのスタートとして必要なことは、マイノリティーの立場の人の生き辛さに気づくことである。以下は日本で生活する外国人（外国にルーツをもつ人々）の多くが感じている4つの壁である。

①「ことばの壁」…ひらがなやカタカナ、そして漢字が入り混じった複雑な言語で、必要な情報を得るためには大きな壁となる。日本語指導が必要な児童生徒数は増加し続けているが、必要な支援が行き届いていない現実がある。高校生等の中退率が高いだけでなく、その後の進学率の低さや卒業後の不安定な非正規就労、さらには進学も就職もしていない人の数が多いことなどが課題である。

- ②「文化の壁」…自身の生まれ育った環境の中での「当たり前」が通用しない。好意をもってしたこと、文化の違いによって相手に誤解されたり避けられたりすることがある。「暗黙の了解」なども生き辛さにつながっている。
- ③「制度の壁」…日本国籍がないことでもなれない職業がある。また、自分たちの生活に直結する様々な不利な制度があっても参政権がなく、変化を起こせない。在留資格によっては家族と一緒に暮らせない人もいる。
- ④「こころの壁」…周りから日本人として見てもらうためのハードルが高い。知らず知らずのうちに染み付いた外国人に対する偏見（アンコンシャスバイアス）は多く、見た目の違いや名前から警察官からの職務質問を受けるというレイシャルプロファイリングという問題もある。「外国人」という一つのカテゴリーで判断するのではなく、「みんなが同じ人間である」という根本的な理解を広めていく必要がある。

感想

私の勤務する職場でも外国籍の住人（児童・生徒）が増加していて、多様性についての理解がこれまで以上に必要だと感じていました。また、個人では訪問することが難しい現地研修に魅力を感じたことが、本セミナーに参加させていただいたきっかけです。今回参加された様々な背景をお持ちの方々とは初めてお会いしたにも関わらず、昼食をご一緒させていただいたり、帰りの電車で親しくお話しさせていただいたりして、人とつながる楽しさを実感しているところです。

在留外国人が直面している生き辛さは「4つの壁」で説明があった通りだと思いますが、マイノリティーの立場にある人々の生活をよくするためには、マジョリティー側が理解を深め、自身の誤った認識について改めていくしかないと思っています。第1回のワークショップでは、「知っているつもり」でいたことがそうではなかったり、「新たな発見や気づき」につながったりすることも多くありました。今後も参加者やサポーターの皆さま

と一緒に学ぶことを楽しみにしています。

（雲出 旬由）

《午後前半》

（1）「開発教育とは」（ミニ講義）

国際理解教育 開発教育 国際教育とは

- * 国際理解教育・・・過去の世界大戦が起こった原因は、異文化を理解出来なかったからではないかと考えられている。異文化理解を進めるために始まった教育
- * 開発教育・・・先進国と途上国の間に大きな経済システムの差がある。南北問題と開発援助を理解し、問題解決に参画することが大切であることから始まった教育。
- * 国際教育・・・国際化社会において、地球的視野に立って、主体的に行動するために必要と考えられる態度・能力の基礎を育成するための教育。そのねらいは、自己を確立し、他者を受容し共生しながら、発信し行動できる力を育成することにある。

教育において大切なことは、

「聞いたことは忘れる」

「見たことは覚える」

「やったことはわかる」

「発見したことはできる」



感想

国際理解教育という言葉は、よく耳にするようになった。外国のことへの関心や理解を高めるといった、日常生活からは少し離れたことを学ぶイメージを抱いていたが、研修を通して、身近なこ

とが世界と繋がりを持っていることに気がつくことができた。

また、開発教育という言葉について深く学ばせていただいた。私自身、未だに、開発教育を説明することが難しいが、グローバル化された社会において、ある国で社会現象が起きると、違う形で他の国が影響を受けるということが起こることを、ワークショップを通して知ることができた。この講義を通して、開発教育とは、生涯を通して学ぶことが必要なものであることを理解できた。そしてよりよい社会を創造し、積極的に社会参加することの大切さに気づくことができた。

教育において、大切なことがとても身にしみた。学んだことをアウトプットすることで自分自身のものにできると感想を書いてみて改めて感じさせられた。

(中谷 陽輔)

(2) アクティビティ体験

アクティビティ①「世界がもし100人の村だったら」

過去・現在・未来・・・世界の、日本の人口がどのように変化しているのかクイズ形式で予想した後、個々にカードが配られる。100人の村に住んでいる人物像についてのカードである。そこには、A～Hまで性別や年齢層、言語や住んでいる地域などが書かれている。その情報を基に、大陸ごとに分かれてそれぞれの言語で挨拶を交わし、世界の縮図である100人の村の村人になって実際に体験していく。飢餓や文字が読めない家族もいて、地球上の様々な人の存在や周囲の人がどんな気持ちか知る機会を得た。



アクティビティ②「ちがいのちがいがい」

最初に何枚かの例文の書いたカードが配られる。そして、いくつかのグループに分かれて、“あってもよい違い”や“あってはならない違い”、“どちらでもない”の3つに分けていく。話し合いを通して、お互いの思いを知らながら考えを深めていく時間となった。例文はA～Oまであり、“ブラジルや朝鮮、日本の学校について”や、“実際にあったこと”がほとんどであった。各グループの机を順に見て回り、どのように違うのかを知り、更に考えを深めることができた。



感想

世界の出来事は、自分の選択や生活と繋がっていることがワークショップを通して実感することができた。生活の中で何かを選択する際には、どのような結果をもたらすのか予想したり世界で起きていることを自分事として捉え、何ができるのかを考え続けたりすることが大切だと感じた。また、お互いの意見を尊重することや安心して意見を言える環境を整えることで答えを導いていくワークショップを体験して、日本で生活をしていて不安を抱えている在留外国人をはじめ、様々な背景のある人達も皆が安心して自分が出せる環境を作れるように理解を深めていきたい。

(中谷 和恵)

第2回 「ブラジル人学校の生徒との出会い」

【開催日】2024年8月6日（火）

【参加者数】受講生：15人 サポーター：9人 見学者：2人

【会場】日本ラチーノ学院（東近江市）

【ファシリテーター】大槻 一彦さん、竹辺 このみさん（Glocal net Shiga）

《午前》

（1）異文化体験ゲーム「バファバファ」

ラチーノ学院の高校3年生に参加してもらいワークを行った。セミナー参加者とラチーノ学院の生徒で教室を分け、ファシリテーターの指示に従ってそれぞれ架空の国家の住民になりきった。お互いに調査団を適宜派遣し、観察や触れ合いを通して相手の文化を理解することを疑似体験した。

1) 自国の理解

まずセミナー参加者の所属する架空の国の文化を理解することから始まった。主に4色のカードを用いた活動を行うため、その説明があった。昔ながらの数字や色の呼び方を使ってカードの交換を行う必要があった。また相手の持っているカードの色を見ながら、自分と同じ色の手持ちカードを3枚連続にするため少々複雑なルールだった。またカードを使った活動のルールだけでなく、笑わない、肩を叩いて挨拶をする、出世の仕組みがあるなどの全般的な特徴についても把握した。



2) 初めての調査団の派遣

ルールを定着させた後、ラチーノ学院の生徒が属する架空の国の文化を理解するために調査団が派遣された。2人のセミナー参加者が選出され、ラチーノ学院が属する国に潜入した。同様に2人のラチーノの生徒がセミナー参加者の属する国に調査に訪れた。出会ったラチーノ学院の生徒にも同様にカードの交換を試みた。何も状況を理解していない様子だったので、相手のカードを見ながらルールに基づいて一方的にカードの交換を行った。その際カードを1枚取ろうとしたが、抵抗する素振りが見られた。詳しい理由は不明だが戸惑っているように見えた。



その後調査団が戻り、ラチーノ学院の生徒が属する国に関する報告があった。「温かく迎えてくれた」、「指を出して勝負している」、「交換ではなく一方が渡してもう一方が受け取る」、「偶数と奇数を意味する言葉を発している」など多くの基本的なことが分かった。しかし数字や色に意味があるのか、複数人でカードのやり取りも可能なのかなど1回の派遣では分からないことも多くあった。



3) 数回に渡る派遣を通して

お互いの文化を理解するために派遣は続けられた。セミナー参加者の国ではもっと自国の文化を誇張しようという話にもなった。そこで具体的には陽気な人への非難や、出世の象徴であるリボンやシールのアピールなどを行った。またラチーノ学院の生徒もカードの交換を行うことなどは理解を示しているように見えたが、出世など複雑なルールは理解されていないように思えた。数回の派遣を通して全てのセミナー参加者がラチーノ学院の生徒が属する国を訪ねた。部屋に入ると特定のセミナー参加者が多くのラチーノの生徒からのブーイングを受け、カードを渡した時にはラチーノの生徒が喜んでいて、その行動が起きた理由は何なのか。結果は分かっても原因が分からないことが多々あった。ゲームの最後に分かったことを黒板に書きだした。断片的な情報を広い集めながら相手の文化を理解するように心がけたが、数回に渡る派遣を経ても解明されなかった点も残った。



4) ラチーノの生徒との対話

昼食後、ラチーノの学生とセミナー参加者がグループとなりゲームの振り返りを行った。

初めに簡単なポルトガル語を用いて改めて自己紹介した。その後ゲームに関してざっくばらんに英語も使用しながら話した。ラチーノ学院の学生から「何と言ってカード交換したのか」と聞かれた時には発音とその意味を教えた。「何を目指していたのか」などを聞かれた時には同じ色で連続する3つのカードをそろえると出世することができることを伝えた。どちらも相手の属していた国には無い概念であったため、少々困惑した模様だった。セミナー参加者からもラチーノ学院の生徒に疑問点をぶつけた。特に手持ちのカードを渡した時に喜んでいて理由として、「相手に与えることは喜ばしいことだから」という回答を得た。自分自身にとって直接メリットがある理由を想定していたため、意外だった。

一通り話した後、ラチーノ学院の生徒が従った国の文化が書かれた紙の内容を読みやると全体像をつかんだ。多文化共生の難しさや理解できた時の嬉しさを同時に感じられたワークだった。

感想

序盤の調査団員は挙手制で募集されたが、私は立候補することをためらった。相手の文化に関する情報が一つもない状態で見知らぬ場所に飛び込むことは、私も含め多くの人が不安を抱いたと思う。しかしこれはゲームだけの話ではなく実社会でも同じことが言えるだろう。在日外国人は様々な背景を持って日本で生活している。住み慣れた

故郷とは異なる言語、文化、ルールの壁に直面し、不安を抱くことは容易に想像できる。これまでの生活を振り返ってみて「当たり前ができない/分からないのはなぜ?」と冷たい目で見つめたことはないだろうか。そのような行動を取ってしまう理由として私たちの無知がある。自分たちが多文化に触れる機会が少ないからと思われる。しかしこれから多くの外国人を受け入れ、日本から海外進出するケースも増えている。グローバル化が進行する中で自分の当たり前は全ての人には適応しないという思いを持って、手を差し伸べられるような人になりたい。

特に印象に残ったことがブラジルにルーツのある方が「失敗した時や間違った時には言い訳をした方が良い」とおっしゃったことだ。日本では自分の非を認めていないことや無責任を意味するため、私は頑なに避けてきたことである。ブラジルの場合は言い訳をせずにすぐに非を認めることは物事にしっかりと向き合っていないとみなされること。このように真逆の価値観を持っていることもあるためお互いの文化を知らないとトラブルの対処が不可能になると思った。そのためこれを機に世界の民族や文化について目を向けてみたい。

(山本 祥也)



《午後》

午後からは、2つの教室に分かれて、セミナー参加者とラチーノ学院の生徒でグループを組んで活動を行った。学院の生徒たちのファミリーヒストリー

を聞いて、日系ブラジル人の歴史やその子孫である彼らの経験してきた苦難を学んだ。

《教室①》

(1) 日系人生徒によるファミリーヒストリー発表

① 1人目

ひいおじいちゃんがブラジル人。自分もブラジルで生まれ、少し前に日本に来た。苗字に「弓削」という漢字が入っており、これは弓を削る人、又は弓の職人に由来する。弓削家は、昔から技術と勤勉さを重んじる家系だった。親戚（ブラジル人）も、今滋賀に住んでおり、この発表をするに当たって、写真が必要な為、久しぶりに連絡をした。



② 2人目

自分のルーツを調べようと思い、インターネットで自分の名を検索したところ、広島船が出てきた。そこにひいおじいちゃんも乗っていた。そこにひいおばあちゃんも乗っており、のちに2人は、ブラジルで出会い結婚したという。そこで、おじいちゃんが生まれ、おばあちゃんとブラジルで出会い、結婚した。そこでお父さんが生まれ、お母さんと結婚し、自分が生まれた。ポルトガル語は話すのが得意だが、日本語は全く話せない。



(2) グループディスカッション

受講生とラチーノ学院の生徒でお互いの文化の違いなどを話した。例えば、ラチーノ学院の生徒が感じた文化の違いは挨拶だ。日本は、お辞儀や「おはよう」だけを言うが、ブラジルでは、ハグとほっぺにキスである。そのため、ラチーノ学院の生徒が日本人に挨拶する時、どうすればいいのかちょっとためらう時がある。次に、受講生が感じた文化の違いは、学校の校則だ。ラチーノ学院の生徒は、メイクや髪の毛を染めており、それは、日本の学校では禁止だ。それをラチーノ学院の生徒に伝え、「ブラジルでは特に問題がない」とのことだった。



感想

ファミリーヒストリーで登場した祖先全員が、生きる事やお金を稼ぐために異国の地に移住しているのがすごいなと思った。言語の壁などを考えると、私には未知の世界で少し怖いなと思った。まだ、15年しか生きていない自分だが、このセミナーを通して、異文化の理解が深まったし、もし、日本国内で外国人が困っていたら、率先して声を掛けたい。自分は、今回共に過ごしたラチーノ学院の生徒よりも2歳年下だが、みんな優しくしてくれて、とても幸せだった。それに、ラチーノ学院の生徒も私に日本語で話してくれてとても嬉しかった。また、どこかで巡り合いたい。今日の出会いに感謝。

(村尾 紅美)



教室① 集合写真

《教室②》

(1) 昼休みの交流

みんなで昼食をいただいた後、参加者はそれぞれラチーノ学院の生徒たちと一緒に昼休みを過ごした。体育館でバレーボールをしたり、生徒の販売するアイスキャンディを購入したりするなど、それぞれ学院の生徒との交流を楽しんだ。

(2) 午前の活動のふりかえり

参加者と学院の生徒が半々となるような5、6人のグループを作り、午前中に行ったワークショップについて振り返りを行った。午前に行ったワークショップの内容は、日本人の参加者と学院の生徒がそれぞれ全く性質の異なる2国に分かれ、互いに少しずつ交流しながら文化や価値観の違いを体験するというものだった。その活動を踏まえ、午後の振り返り活動では、参加者と学院の生徒がお互いの国に設定されていたルールや価値観を考えるという活動を行った。結果、それぞれの国の違いについては意見が活発に飛び交っていたが、相手の国に設定されたルールや価値観（例えば男女の地位の違いやカードゲームの細かなルールなど）を当てるのには苦労していたようだった。



(3) 日系人生徒によるファミリーヒストリー発表

- ①一人目の男子生徒は自分のルーツを祖父母の代までさかのぼってファミリーヒストリーを話してくれた。彼のルーツは、多くの日系ブラジル人が持つルーツと同じように、出稼ぎブームの時代、祖父がブラジルへ渡ったことが始まりだという。
- ②二人目の女子生徒は自分の家族と移住の経験をも

とに、移住することにもなう苦難苦勞について中心に語ってくれた。彼女はラチーノ学院に在籍しているがブラジルからの移住というわけではなく、学院に来た当初はそのことで不安だったが、学院の皆が優しく受け入れてくれたのだと話してくれた。

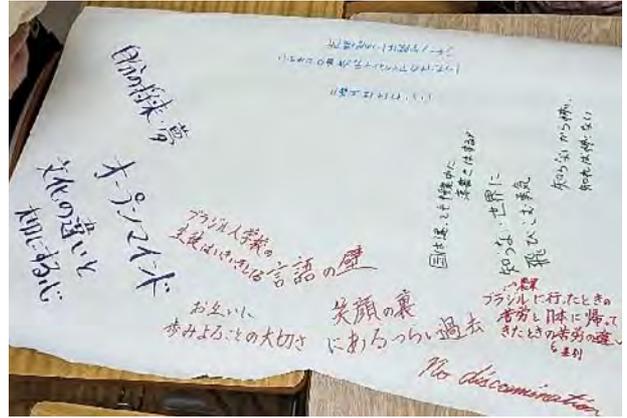
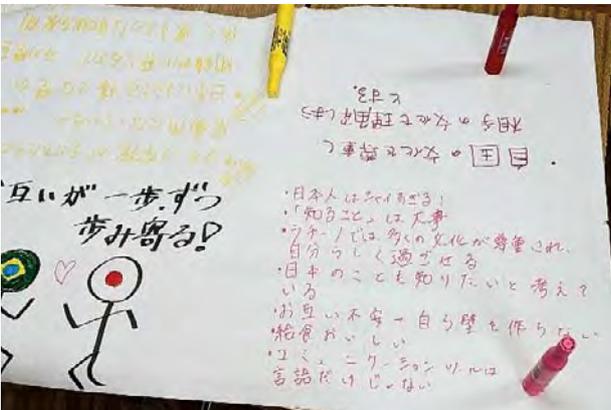


発表後は生徒への質問や逆に生徒から参加者への質問の時間があった。通訳として参加した方が、自分の海外で生活した経験をもとに価値観の違いについて話す場面もあり、日本人の参加者側からも多くの話を聞くことができた。お互いについてより深く理解し合うことができ、皆最後には抱擁し合って親愛の関係を示していた。



(4) 受講生のみによる一日のふりかえり

今日の活動で感じたことをふりかえり、模造紙に書いたのち、他のグループの作品を見て回った。



感想

昼休みの時間には、私は生徒たちとバレーボールをして過ごした。生徒の中には日本語も英語も話す事ができず、コミュニケーションを取ることが難しい生徒もいたが、運動している最中は言語の壁を感じることなく一緒に楽しむことができた。私の記憶では、小学校・中学校での国際交流活動の際、言語の壁が邪魔をして心からコミュニケーションを取ることができなかった。そのような場面では、今回のように言葉の必要が少ないスポーツのレクリエーションが大きな効果を発揮するのではないかと感じた。

また、今回の活動全体を通して、ラチーノ学院の生徒たちのコミュニケーションに対する積極的な姿勢を学ぶことができた。初めて会う自分にも臆せず、伝わるまで話しかけ、握手やハイタッチ、ハグといったボディランゲージを多用して意思疎通しようとしてくれるなど、はっきりと自分の意思を伝えようとしていると感じる場面が多くあった。そのおかげか、学院の生徒たちには互いに強く信頼し合っているような雰囲気があった。自分の普段の人間関係を振り返ると、衝突を恐れてはっきりと意思を伝えることを避けることが癖になっていたと思う。彼らを見習って、強い信頼関係を築けるようになっていこうと思った。

(福山 太陽)



教室② 集合写真



最後の集合写真

オプション企画「学習支援教室訪問」

【開催日】2024年9月14日（土）

【参加者数】受講生：7人 サポーター：11人

【会場】学習支援教室「ワールドアミーゴクラブ」 近江八幡市金田コミュニティセンター

【講師】ワールドアミーゴクラブ 代表 吉積 尚子さん

見学の様子

10時～10時50分まで 勉強タイム

漢字ドリル、計算ドリル、英単語の書き取り等

- ・1時間集中して取り組む人もいれば、少し勉強して後は遊ぶ子もいた。
- ・一人ひとりのその日の取り組みを記録し、進捗を確認。ポイントを貯めると消しゴムがもらえる。



11時～12時 おやつ、遊ぶ時間

- ・おやつの種類は豊富で、グミやポテトチップスをつまんでいた
- ・ジェンガ、UNO、ボードゲーム等受講生と共に楽しんだ



12時以降

- ・子ども達や保護者はお弁当を受け取り帰宅

14時頃まで

- ・ボランティアの皆さんと受講生で座談会や質疑応答

内 容

1. 団体のなり立ちについて

発端は南米出身労働者の家族、子どもの支援のための「ラテンアメリカ子どもクラブ」。その後、韓国ルーツの子どもと南米ルーツの子どもへの支援を合同化し、「ワールドアミーゴクラブ」が誕生した。当初は夏休みのみの活動だったが、子どもの居場所づくりや学習支援をより行うために、通常期の土曜日にも教室が開かれることになった。

2006年には、たまたまクラブの子ども達と同じ中学校に所属したことから、学校の教室で、日本語、進路指導が可能となり、内4名が志望校に合格した。

現在、金田コミュニティセンターとマナビイを拠点として、進学支援や日本語支援ボランティア、弁当配食等の活動が行われている。

2. 子ども達について

- ブラジル人が最多だが、最近ではベトナム人が増加
- 子ども達を取り巻く様々な障壁
 - ➡身体的特徴による差別
 - ➡言語能力と学習能力の乖離
 - ➡親子間コミュニケーションの問題



3. 質疑応答

- 中学校の教室で日本語支援をしていたとき、先生の関心が低く悲しかったということだが、日本の学校がどう変わってほしいという考えはあるか？
 - ➡先生は多忙で、一人ひとり見ていくことは難しく、家庭の問題も露呈しにくい。そのため、学校との協議会ではアミーゴクラブと学校での子ども達の様子を共有し合っている。
- 学校の働き方改革が外国にルーツを持つ子どもの支援にどのように影響するか？
- 学校での指導法について、文部科学省は日本語のアセスメント（1－6レベル）に応じた指導を推奨 → 十分なされていない
- 言葉と学習のギャップは大きい等について話し合われた。

4. ボランティアの方の話

小学校で指導経験を持つ方の視点からみた、学校の支援体制や工夫、支援する大人側の多様な考え方や問題点についてお話を伺った。日本語の細かいニュアンスや熟語が難しいこと、親の通訳、これらは子どもたちの気疲れの原因になっている。また、外国人保護者に日本の学校のルール（PTA等の親の関与について）は理解が難しいこともありきちんとコミュニケーションをしていくことが必要だ。そして、そのような支援の必要性を（学校関係者含め世間にもっと広めていく必要がある、という事だった。

感想

言葉の壁は、学校や地域だけでなく家族間でも存在することだ。親も地域社会に慣れていく子どもと一緒に、日本語支援や就労を通して変化していくことをサポートする役割が必要とされることを学んだ。言葉や文化的背景の違いを乗り越えることは簡単ではないので、様々な支援を要すると思うが、その拡充のために何ができるか考えていきたい。

(HS)



第3回「日本で子育てする外国人保護者との出会い」

【開催日】2024年9月28日（土）

【参加者数】受講生：14人 サポーター：11人 見学者：1人

【会場】ピアザ淡海

《午前 講演》

「日本に暮らす外国人が抱えている課題

～五つの壁を乗り越えて～」

【講師】（特活）外国人女性の会パルヨン

代表 ハッカライネン ニーナさん



外国人女性の会パルヨンについて設立の経緯や活動について紹介があった。

活動の目的

- ① 外国人女性が日本で安全に、安心して暮らせる社会づくり
- ② 外国人女性がすべてのライフステージにおいて、自分の力が発揮できる、自分らしく生きることができる社会づくり
- ③ 外国人と日本人が仲良く、楽しく暮らせる社会づくり

（1）日本に暮らしている外国人が抱えている5つの壁について

①言葉の壁

動画視聴

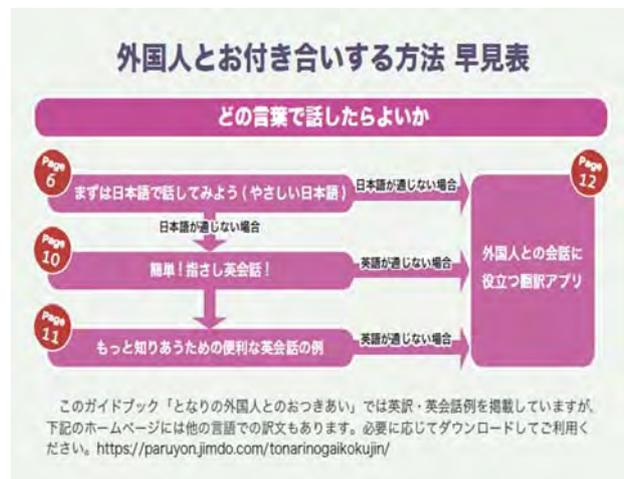
「やさしい日本語ラップ『やさしいせかい』」

<https://youtu.be/2fYxhoUwqAg>

日本語は簡単ではない。漢字を覚えることやニュアンス等を汲み取るのが難しい。外国人が日本で暮らす背景や環境も様々であるため、日本語のレベル

も様々である。日本語での日常会話は上手いが、読み書きはかなり難しいという人も多い。

日本語が理解できる人も多いので、日本で暮らす外国人には、まず日本語で話しかけてほしい。その際、方言などは使わずに、まずは「標準語」⇒「やさしい日本語」⇒「外国語」の順にコミュニケーションを図るのがよい。実際に日本に暮らす外国人のほとんどは英語のネイティブ話者ではないためである。



②経験（情報）の壁

外国人は情報弱者と言われる。地震や防災訓練に参加した経験がなかったり、国によって医療制度や教育制度が異なっていたり、新卒採用が主の日本の就職活動と即戦力を求める海外の雇用スタイルの違いで留学生などが就職活動で苦労する例などを紹介。経験したことがないことは、わからないため経験の壁は厚い。制度の違いについて説明してくれる人も必要となる。

1995年阪神大震災



阪神淡路大震災の時には、避難指示がわからなかったということから、外国人の方が被害が大きかったことがわかっている。経験の壁は命にかかわることもある。

③文化の壁

学生時代にホームステイした際、入浴後に湯船のお湯をすべて流してしまい、ホストマザーに叱られた例や、友人宅に泊まった際に友人の父親の後ろにお風呂に入ることに抵抗感を覚えたことなどの例を紹介。また会議の前には根回しが必要だといった日本独特の文化に戸惑った経験がある。日本の文化や習慣のシステムについて説明してくれる人（文化の通訳）がいたら、外国人はとても助かる。

パルヨンでは、ガイドブックや動画を作成している。

動画視聴

「日本暮らし 近所の人と仲良くなる方法 3昔からの変わった挨拶」

<https://www.youtube.com/watch?v=4AQtvndcNEA>

④制度の壁

在留資格によっては、生活保護を受けることができないことや、国籍がないと選挙権がないこと、二重国籍が認められないこと等の制度の壁の例が挙げられた。

⑤心の壁

満員電車の中で外国人の横に座る人がいないことや会議の席で外国人の自分にだけ名刺交換をしてくれない、日本語を話しているのに日本語で話してくれなかったりなども無自覚の差別（マイクロアグレ

ション）の例として紹介された。外国人に不動産を貸してくれないことも多い。イギリスであれば外国人差別で犯罪である。

動画視聴

「第三者返答」

https://www.youtube.com/watch?v=56FPX_uOY0g

⇒ 話しかけてきた人の見かけの印象などから、その人との意思疎通が問題ないにも関わらず無視して、その人と一緒にいる人に返答すること
こうした第三者返答は、外国人がよく経験することである。日本語ができる外国人は意外に多いので、まずは日本語で声がけてもらいたい。

みんなにできる多文化共生

- ・挨拶をする。声をかける。
- ・外国人が日本語を話したいとき、日本語を話す。
- ・外国人支援団体をSNSでフォローする、いいね！をする
- ・外国人支援団体でボランティアをする
- ・寄付する

詳細はHPをご覧ください。

(2) 外国人に言葉を伝えやすくするための「やさしい日本語」について

ふりかえりでは、今回の講義で出てきた「やさしい日本語」のポイントの紹介があった。

- はさみの法則…はっきり、最後まで、短く
- 一文を短く、文の構造を簡単に
- 漢字は少なく、すべての漢字にルビ（ふりがな）をふる、熟語を避ける
- 文は、分かち書きに
- 〇〇ことができます、〇〇してください
- 敬語、尊敬語、方言を使わない
- できるだけ主語を使いましょう
- 外来語はなるべく使わない
- ローマ字は使わない
- 擬態語や擬音語は使わない
- 時間や年月日の表記はわかりやすくする
- イラスト、写真などを使う

やさしい日本語には正解がない。工夫して、試していくことで、上手になっていく。

どのように日本の書類で使われているような難しい日本語や病院等での専門用語を簡単に表現するのか、また簡単に表現することは日本語が苦手な外国の方々だけでなく日本人にとっても読みやすく理解しやすいものとして「やさしい日本語」の重要性をみんなで確認した。

質疑応答

Q. 第三者返答の紹介で、目線などでも知らない間に傷つけてしまうとあったが、通訳が入っている時はどうしたらよいか？

A. 病院の例で、医師は通訳に向けて話すことが多い。しかし、実際には外国人患者に目線を合わせて話す方がよいと思う。

感想

日本に暮らしている外国人の方は、仕事上の関係で日本に来ていたと思っていたが、留学生としても日本に来ていて、暮らしていることを知りました。

ニーナさんが代表を務めているパルヨンは日本に暮らしている外国人女性を支えるための団体で、日本で安全・安心で暮らせる社会づくりやライフステージにおいて、自分の力を発揮し自分らしく生きることができたり、日本の方と仲良くできる団体と初めて知りました。また、五つの壁については、言葉は壁だと感じていたが、文化や情報、制度、心は意識することが全くなかったのが、外国の方は壁だと感じていると知りました。

やさしい日本語については、短く話し、方言などは使わず、標準語で話すことで外国の方も伝わりやすくなりコミュニケーションがとりやすくなると感じました。

私たちにできることは少ないと思いますが、外国の方が住みやすくなるには日本にずっと住んでいる私たちが制度などをしっかり理解する必要があると感じました。(MY)

《午後》

【ファシリテーター】

川辺 純子さん (Glocal net Shiga)

グループに分かれて日本で子育てをする6人の外国人保護者の方（中国、フランス、マダガスカル、ブラジル、ベトナム、インドネシア）と話をした。日本で生活する上での悩みや子育てにおける不安なことを理解し、今後、私たちや日本社会にできるサポートを考えた。



(1) ワールドカフェ形式

ワークショップの進め方は、机に模造紙とペンを置いて、自由に書くことができる。時間ごとに話をする。模造紙には、質問したことや会話したこと、参加者が思ったことや、会話のツールとして使うなど様々な使い方をした。また、お菓子や飲み物もあり、話のきっかけに使った。



(2) やさしい日本語の実践

午前に“やさしい日本語”の話を聞いた。保護者もその子どもも日本語の習得度は様々で、日常会話からあいさつぐらいしかできない人がいた。そのため、交流を図るうえでは、“やさしい日本語”を実

践する機会の一つとなった。



(3) 海外出身の保護者より

私はフランスから来られたアデリンさんと、ベトナムから来られたトゥーハさんと交流しました。その中で、私たちにとっては当たり前になっている事の新しさ、それは言語や文化の違いによるものでした。

アデリンさんは大学生の頃から日本で暮らしておられ、その間に日本人との交流を楽しかったという話をしてくださった。保護者として困ったこととして、学校からのお便りについて困っていると話してくれた。フランスではお便りは年に2,3枚程度しかないと言われていたが、日本では毎週のようにある。そのため、読むのも難しく、読む工夫として、スマートフォンの翻訳機能を使いながら読んでいたと言われていた。アデリンさん自身は、重要度の高さが分るといいと思った、と言われていた。他にも子どもにフランス語で伝えていた言葉が発達検査で使われて、日本語でその言葉を言えなかったため、発達検査でチェックが付いたこともあったと言われた。



トゥーハさんは娘さんと一緒に参加された。特に悩んでいることは、娘さんの教育に関してで、日本語の習熟度と進学について悩んでいた。トゥーハさん自身が、日本語を読むことが難しいと言われていて、将来娘さんがどの程度の読み書き能力があれば日本で生活していくうえで、進学していくうえで困らないのか、という基準が分からない。また、進学に関する情報がもらえるのかが不安である、と何度も言われていた。



感想

日本で当たり前だと思っている事にも困ってしまうことや、小さな気遣いがあれば解決できたのではないかと思う事だった。また、言語、文化の違いという簡単な文字で終わらせていたものの正体について、具体的に知ることができた。そして、話を聞かせてもらって自分に落とし込んだ時に、そうした困りごとのポイントに気づけたが、それらは、小さな行いだけでも解決できるとも思った。お便りをAIで翻訳したものを作るであるとか、優先度や重要度を付けるなどの気遣い、“やさしい日本語”のような形を一つずつ作っていくことで“お互いの良い”を作ることができると感じられた。

(浅野 翔)

全体交流 (質疑応答や感想)

[参加者の感想]

日本の教育制度について、子どもの習い事や進学に関することなど外国人保護者の方も日本の保護者の方も同じような悩みを抱えていると思った。その



ような悩みを解決するために、親同士で交流できるコミュニティがあればよい。

外国人保護者への質問

○まちの人との関わりについて困ったことはありましたか？

- 子どもを預ける場や頼れる人がいないことが悩みである。互いに子どもを預けあえるグループなどを作れたらよいと思う。
- 教育に関する情報をつかむのが難しいと感じる。子どもの進学に対する相談など、すぐに欲しい情報を手に入れることに時間がかかる。
- 幼い子どもを連れていく場があまりないことに困っている。ベビーカーをおして公園に散歩に行くが、夏は暑く外に出ることも大変である。児童館の存在も最近知ったが、もう少し、幼い子どもが遊べるスペースがあると嬉しい。
- 学校関係での手続きが複雑で難しく思う。日本語は話すことはできるが読めないため、子どもが学校からもらう何枚もの手紙を理解するのに時間がかかる。
- 日本では、生まれた年によって小学校へ入学する時期が決まるが、早産で発達に遅れがある我が子のことを市役所に相談すると入学を遅らすこともできると言われた。しかし、小学校に相談するとできないとも言われた。市役所や小学校、病院で連携がとれていないため、こちらもすごく混乱してどうしていいかわからない。



受講生たちのふりかえり

①日本の子育てにおけるキーワードはなにか

- お母さんも私たちが一歩踏み出す勇気を持つこと。多様性が当たり前の他国では、悩みを相談できるコミュニティができてることが多いが、日本では、まだ少ないのではないかと。
- 言語についての壁。子育ての際に、社会で使用する言語や家庭内で使用する言語、学校で使用する言語について悩むことがあると思う。また、日本では日本語のみの表記が多く、そのあたりも改善できれば良いと思う。
- 教育の悩みは世界共通であること。子どものいじめ問題や進学に関する不安など日本人も外国人の保護者も子育てに関する悩みは、世界共通であるためお互いに悩みを打ち明けられることができる場があればよい。

②日本の社会にできるサポートはなにか

- 外国人の保護者の方たちをサポートするコミュニティをつくること。
- やさしい日本語を使うことや書類なども多様な言語に対応すること。
- 各企業が労働している外国人の家族をサポートする制度をつくること。
- 留学の経験を増やせるような制度をつくること。
- 県や市町村が連携して対応すること。
- 通訳の方の配置を充実させること。

感想

私自身は、小学校の教員であるがこれまで外国人の保護者の方には出会う機会もなかったのだが、今後そのような場面に巡り合うことをイメージしながら、今回、保護者の方の悩みや本音を聞かせてもらった。話の中で、文化や宗教の違いから、子どもや保護者の方が悲しい思いをした経験があると聞き、互いのことを知らないと勝手に偏見を持ったり、距離を置いてしまったりしているのだと思った。大人はもちろん子どもたちにも正しい理解や知識をもってもらうために、多様な文化に触れる機会をつくったり、声をかけたりすることが大切だと強く感じた。

(石野 沙恵)

感想

私がこのセミナーで新たに発見したことは「やさしい日本語」である。確かに言われてみれば学校からもらう書類や病院からもらう説明書などネイティブな日本人でもわからないような漢字であったり、なにを言っているかわからないような時候の挨拶などがあることに気がついた。そんな複雑な日本語を外国の方々に理解してもらうのは無理があると思ったし、この「やさしい日本語」という考えをもっと教育機関や公共機関に認知させていくことが重要であるし、そうすることにより日本で子育てする外国の方々の助けにもなると感じた。

(平尾 太一)



第4回「さまざまな宗教との出会い」(神戸スタディツアー)

【開催日】2024年10月19日(土)

【参加者数】受講生：10人 サポーター：9人

【ファシリテーター】神戸学院大学非常勤講師 久保 哲成さん

神戸にある様々な宗教施設や資料館を訪れ、信者の方にお話を伺い、理解を深めることが目的。

(1) 神戸ムスリムモスク (イスラム教)

①モスク内見学

お祈りする部屋を見学し、雰囲気を感じた。

②日本人イマーム (指導者) からのお話

日本人信者の方から、イスラム教の概要や、モスクの説明をお伺いした。



(2) 海外移住と文化の交流センター

①施設の方からの講義

日本人のブラジル移住や、メキシコ移住のこと
についての講義

②展示の見学

当時使われていた備品や、資料を見学し、説明
を受けた。



感想

ムスリムモスクを訪れて感じたことは、予想以上に「親しみやすい」ということでした。ニュースなどでは、過激な部分を取り上げられているため、緊張感を持って訪れたが、また行ってみたいと思うほど素敵な場所、考えでした。日本にしながら、モスクの厳かな独特の雰囲気を感じることができた。

海外移住センターでは、日本の経済の事情での南米移住に関するお話を伺った。私の周りには日系ブラジル人や日系メキシコ人の友人がいるので、興味深い内容だった。情報が無い当時の方々にとって、夢の国のように扱われていた南米移住の

広告は、さぞ魅力的に感じられただろう。実際は異国で言葉や文化の違いだけでなく過酷な労働に苦しめられていたことを知り、胸が痛くなった。友人の祖先には大変な苦勞があったことを知ることができ、さらに調べようと思った。

(南井 萌果)

(3) 関西ユダヤ教会シナゴーク (ユダヤ教)

①関西ユダヤ教会シナゴーク概要

この場所は関西唯一のユダヤ教シナゴーク (会堂) であり、神戸にシナゴークができたのは80年以上も前のことである。1935年頃では独立した建物ではなく、個人宅の1室で礼拝をおこなっていた。その後、1956年に商人ソロモン氏の家の倉庫を改造してシナゴークとした。現在のシナゴークは献金によって1970年3月に新設されたものとされている。現在においてもこのシナゴークはユダヤ人ラビ (司祭) が在籍している関西在住ユダヤ人のコミュニティとして重要な役割を果たしている。



②ユダヤ教徒の方からの解説、質疑応答

先週から新年に入っており、ユダヤ暦では今は5785年となった。ユダヤ教の大きな特徴としては安息日があることであり、安息日には何もしないことがルールであり、火を使ったりすることもできない。みんなで集まってご飯を食べて、話したりして過ごす。食べ物にはコーシャーフードと決



まっているため日本では簡単に調達できない。

Q. カツラを被るのに理由はあるのか？

A. 結婚したら地毛をみせることを避ける方がよいのでカツラをかぶっているが、やっている人は少ない。

Q. 祭壇のタペストリーに意味はあるのか？

A. 今は新年のタイミングなので新年用の期間限定のタペストリーがかけられている。中央にはリングと角笛が刺繍しており、その両サイドに12使徒のマークが描かれている。

(4) バグワン・マハピールスワミ・ジェイン寺院(ジャイナ教)

①バグワン・マハピールスワミ・ジェイン寺院概要

神戸のジャイナ教徒たちが出資して建てられた寺院で、1985年に落成式が行われた。東京にもビルを借りる形でお寺が設けられているが、独立した建物を持つのはバグワン・マハピールスワミ・

ジェイン寺院のみである。建材の大理石はすべてインドから取り寄せられており、ジャイナ教建築を学んだ日本の業者が建てた。阪神淡路大震災の際には避難所にもなった。ジャイナ教徒にとって寺院は非常に重要な場所であり、ジャイナ教徒はほぼ毎日お祈りに行くため、寺院の近くに住む場合が多い。

②ジャイナ教徒の方からの解説、質疑応答

ジャイナ教は約2500年前、仏教と同時期に誕生した。仏教と少し似ている部分もある(ニルヴァーナの考え方など)。ジャイナ教徒の数はインド国内で600万人ほど存在し、インド国外だと50万人ほど存在している。ジャイナ教はベジタリアンであり、虫などもどんなに小さくとも殺生は厳禁とされている。そのような理由から玉ねぎも食べない。

また、5月でこの寺院は40周年を迎える。最初、お寺はなかったが、やはり必要だという話に

なり、20数人でお寺を建てた。現在は35～40家族ほどが寺院に通っている。

信心深い人は裸足で寺院へ来る。この理由は靴を履いていると虫などをうっかり踏んで殺してしまっても気づくことができないからである。その理由からジャイナ教のお坊さんは靴を履かず、服も一枚のみで車などを使用せず、すべて徒歩で移動する。

(5) 神戸グル・ナーナク・ダルバール (シク教)

①神戸グル・ナーナク・ダルバール概要

この地に神戸グル・ナーナク・ダルバールが建てられたのは1966年のことである。1950年代に神戸市中央区磯上通のインド人宅で行われていた礼拝がこの寺院のルーツとなっている。1999年に東京のマンションの一室に寺院が建設されたが、寺院単独の建物としては神戸グル・ナーナク・ダルバールが日本唯一になっている。一階にはランガル（礼拝後に提供される無料の食事）のための食堂があり、2階の広間が礼拝スペースになっている。その礼拝スペースの中央には天幕の下がる高座に聖典『グル・グラント・サービフ』が安置され、その前の祭壇には開祖ナーナクの肖像画やシク教のシンボルがおかれている。

現在この寺院には礼拝をリードする専門職がインドから招かれており、祈りがささげられ、メインの礼拝は日曜の昼に行われている。少ない時でも50人ほど、多い時は150人ほどが集まる。

②シク教徒の方からの解説・質疑応答

シク教は神様から見たらみんな一緒のため、男女の違いがあろうが身分の差があろうが人々はみんな平等であり、同じレベルである。そのため礼拝をするときは神様の前にあたるため、王様だろうが何だろうがみんな隣と一緒に床の上に座るのである。こういった考えがあるため、シク教はカースト制度からは独立していて、王様も貧乏な人もみんな同じという考えをしている。お坊さん（シク教の専門職）になるのも男性でも女性でもなることができる。礼拝後は12:00～13:00の間に必ずご飯が振舞われる。どんな人でも来て大丈

夫である。ルールとしてお酒やたばこはダメで髪の毛は隠せば大丈夫である。

シク教は520年ぐらゐの歴史がある。インドのグルドワラでは入り口が1つではなく、四方すべてに入り口があり、誰でもどこからでも入っていいよということを体現している。神様の寝る部屋と祭壇は別であり、夜は部屋で寝て、昼間は祭壇に来る。神様は生きているという考えである。

シク教の人々は昔から人を守るために戦ってきた。ターバンを怖がらないでほしい。



感想

今回様々な宗教の寺院や施設を訪れて、どの宗教においても共通してとても親切に迎えてくださったことが印象に残っている。今回訪れた各施設や寺院は教徒の方々にとってはとても大切な重要な場所であるとともに、神聖な場所である。それに加え、異教徒である私たちに隅々まで見せてくださり、どんな質問でも丁寧に答えてくださり、知らないことを知れる楽しさをとて感じた一日になった。一つひとつの施設、寺院がとても興味深く、どこに行ってもワクワクしっぱなしだった。いろんな人の様々な壁を取っ払ったやさしさに触れ、知らないことを知っているに変えていくことが多文化共生への第一歩なんだと一日を通して強く感じた。未知だから怖かったり、不安だったり、軋轢が生じてしまうのだと考える。今後もこの知っているという状態の物事が一つでも多くなるようにしていきたいと感じた。

(新谷 美晴)

(6) 兵庫マシジド ジャンアカデミー (イスラム教)

パキスタンの方たちが中心に集われている兵庫マシジドにてジャンアカデミー幼稚園とイスラム子ども教室の見学を行った。講師は日本人ムスリマでジャンアカデミー幼稚園の教師をされているナザル智子さん。



①ジャンアカデミー幼稚園見学



兵庫マシジド内にある幼稚園にて施設見学を行った。幼稚園内は土足厳禁であった。園児ごとのロッカーがあり、教室の壁には園児の書いた絵の作品やアラビア語に日本語で読みを振った紙が飾られていた。雰囲気的には日本の幼稚園とほとんど変わらない

い感じがした。普段の幼稚園生活としては日本語、アラビア語の勉強、コーランのお話を聞くなどの日本で暮らすイスラム教徒になるための教育がなされている。また、お絵描きや運動（施設の屋上にある人工芝にて）といった日本の幼稚園児と同様の教育もされているそうである。質疑応答の際に園児の卒園後の進路について伺ってみたところ、日本の公立の小学校へ進学する方やイスラム教徒向けの学校へ進学する方など様々な進路があった。日本の学校になじめずイスラム系の学校へ転校される方もおられるようだ。

②イスラム子ども教室見学

イスラム子ども教室では礼拝場に地域のイスラムの子どもたちが集まり、大人の方から礼拝の作法、アラビア語、コーランについて教わっていた。礼拝を実際に行う際、礼拝が始まる掛け声（アザーン）は順番で回ってきた子どもが行っていた。大人は全員礼拝の衣装を着用されていたが、子どもたちには私服の子もいた。



感想

兵庫マシジドを見学してイスラム教徒の人々が日本での生活で自身のアイデンティティを尊重するために様々な努力と工夫がなされていることが分かった。具体的には、日本語教育の実施、イスラム教についての情報発信といった日本社会適応の支援である。日本では未だに異国、他宗教の文化をしっかりと受け入れる体制がなされていないため今後もっと様々な文化、宗教の方々が住みやすい環境ができればよいと思う。

(奥西 一生)

感想

世界に出ることではしか体験できないと思っていたことが今回身近なものに初めて感じる事ができたと共に、それぞれの思想の中で似ているようで似てない、おんなじなようで違うといった、それぞれの中でもちょっと違うように私たちは感じても、その宗教の中に入っている人々の中ではものすごい違いであったりと、人それぞれ意見は変わっていきます。そんな中で、それぞれ思想の違う人々とどう共存していくのか、関わっていくのがこれからの日本でも重要になっていくし、こ

れからもどんどんヒンドゥー教の人々や、イスラム教の人々などが日本にやってきて、彼らがこれから日本で居心地の良さを感じることが出来る社会を私達が作って行けるようになりたいです。今回のツアーで、普段入りにくかったり、近づきにくいと感じていたところに入ることができて、全てが新鮮でとても楽しく、男女関係について厳しい宗教が多く、日本の無宗教を改めて実感させられました。

(川田 真子)



オプション企画「県内モスク訪問」

【開催日】2024年11月10日（日）

【参加者数】受講生：6人 サポーター：4人

【会場】モスク アンヌール能登川（MASJID AN-NUR NOTOGAWA）（東近江市）

【ファシリテーター】岡 佑里子さん（Glocal net Shiga）

概要

- ①能登川モスクへ訪問（女性はヒジャブをつけて）
- ②モスクの方、ファシリテーターの岡さんからイスラム教の基礎知識について説明
- ③礼拝前のお清めの仕方について実際に見せながら説明
- ④お祈りの見学
- ⑤モスクの方と男女別にインドネシア料理のランチを食べる
- ⑥グループに分かれてフリートーク、ふりかえり
- ⑦全員で写真撮影



この日は、このモスクの女性の会の設立13周年を記念した特別なお料理を振舞っていただいた。

質疑応答

Q. 妊娠中の方や小さい子どもは断食をする？

A. いいえ。

Q. 学校ではヒジャブをつけている？

A. いいえ。恥ずかしいのでつけていない。お母さんは本当はつけてほしいみたい。だから大学生になったらつくと家族のなかで約束した。

Q. ヒジャブを外すときはある？

A. 家のなかではみんな外している。また結婚したときにヒジャブを外して、自分の髪の毛や肌を新郎に見せることで、気を許している、結婚しているという意味にもなる。

Q. イスラム教を信仰しているうえで学校で困ったことはある？

A. 豚肉を食べることができないことにたくさんの人が声をかけてくるのが嫌だ。「アレルギー？好き嫌い？」など毎回説明するのが嫌になる。

Q. 体育のときは肌を見せてはいけないから長袖長ズボンを着ているの？

A. はい。夏でも長袖長ズボンを着るように心がけている。



Q. 日本で生活をするうえでイスラム教を信仰しているならでの困ったことはある？

A. ヒジャブをつけているとたくさんの人に見られる。いまはもう慣れたけど、慣れたからといって嬉しいものではない。

Q. 礼拝前のお清めのときに女性は化粧をどうしているの？

A. ウォータープルーフの化粧品を使ったり、お清めをしたあとに少し化粧直しをするなどしている。少し大変。



感想

まず個人的にブラジル学校にいけなかったため、このモスクでの出会いはとても良いステキな思い出になり、またたくさんの海外の友達をつくることができた。

私は、この体験をするまでモスクについてあまりいいイメージをもっておらず、深く知ろうとする前に、断食や女性は肌を隠すなど少し厳しい決まりがあるというだけで、少し避けてしまっていた。しかし、実際に自分がヒジャブをつけたり、モスクの方からお話をきいて、イメージが変わったのはもちろん、モスクについてもっと深く知りたいと自分から調べたりするようになった。

私が特に驚いたのは、断食で亡くなる人も多々いるということだ。モスクの断食では1ヶ月間、日の出から日没までの約16時間、なにか食べることはもちろん、飲料も禁止されており、どれだけ暑い日でも水を飲んではいけない。そのため、いくら運動を控えたとしても熱中症などで倒れてしまう人や、最悪の場合亡くなってしまった人もいる。

私は初めこの話をきいたとき、なぜ自分の命に関わってまで信仰を続けるのかとても不思議だった。しかし、それと同時に、自分の命をささげる

ほど信じれるなにかがあることがとても羨ましいなと感じた。

日本では、強く宗教を信仰している人がほかの国と比べて少ないため、同じ国の人同士で同じものを信じていることがとてもステキだなと思った。また、私はこれまで留学などを通してたくさんの国の人と出会ってきた。その中でも、モスクの方たちは特にとても温かい心をもっておられて、緊張していた私にとってとても落ち着く雰囲気をつ

くってください、とても温かいアットホームな雰囲気の礼拝堂だった。

たくさん知らないことだらけで、まだまだ話をききたかったが、時間が限られていたので、また機会があれば話をききにいきたいし、SNSでも繋がったのでまたメッセージを送り合ってお互い助けあえたらいいなと思う。

(坂巻 唯花)



第5回 日本に根付く朝鮮半島の歴史と今との出会い

【開催日】2024年11月16日（土）

【参加者数】受講生：12人 サポーター：7人

≪午前≫

【訪問先】渡来人歴史館（大津市）

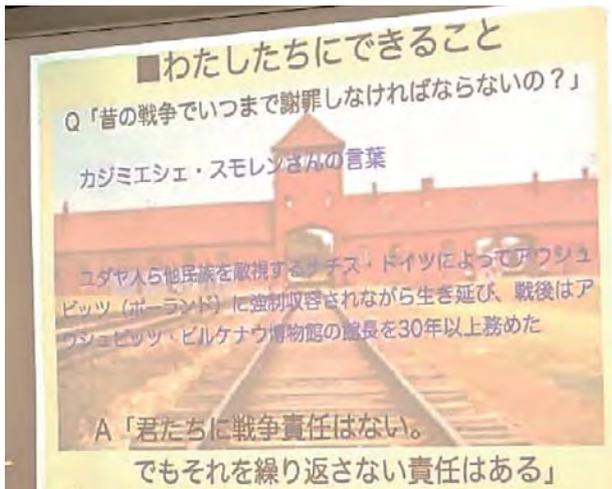
【講師】渡来人歴史館専門員 大澤 重人さん
大澤専門員による講義と解説付きの展示見学を行った。

講義の概要

- 言語の歴史を辿ると、中国から朝鮮、日本へと漢字が伝わったため、韓国語と日本語には共通する部分がある。例えば挨拶である「アンニョンハセヨ」の「アンニョン」は日本語の「安寧」、礼を伝える「カムサハムニダ」の「カムサ」は日本語の「感謝」である。
- かつての日本は中国とソ連からの侵略に怯え、その盾として間にある領土の植民地化を図った。1875年に千島列島、1895年に台湾、1905年に南樺太・関東州、そして1910年に朝鮮である。
- 日本では終戦記念日である8月15日を祝日としているのは韓国と朝鮮のみであり、カレンダーの色も赤くなっている。1948年に韓国が建国され、8月15日は韓国・朝鮮では「解放」、「光復」を意味する日である。



- 1909年には日本にいる朝鮮人の数は790人であったのに対し、1945年には236万人にも及んでいた。その理由としては、生活の困窮、労働者動員が挙げられる。
- 朝鮮人は日本人になったはずであったが、国籍は日本でありながら戸籍は朝鮮であった。なお、朝鮮には憲法が適用されず、朝鮮在住者には参政権がないなどという、日本人でありながら日本人ではないということが起こっていた。徴兵制も適用外であった。
- 敗戦時には200万人以上いた朝鮮人も、1946年末には約56万人に減った。しかし、祖国に帰りたくても帰ることのできない人がたくさんいた。その理由としては、日本での滞在歴が長くて故郷に生活基盤がないことや、食料難や物価高騰などによる生活困難、持ち帰りの制限（お金は一人千円、荷物は113キログラムまで）などが挙げられる。
- 1947年5月2日、「台湾人のうち内務大臣の定める者及び朝鮮人は当分の間外国人とみなす」という外国人登録令が勅令として出された。
- 2021年8月30日にはウトロ地区放火事件という事件が起こり、その犯人は22歳の日本人青年であった。
- 現在の日本では100人いれば3人が外国人であるが、46年後には10人に1人が外国人になると言われている。
- 「昔の戦争でいつまで謝罪しなければならないのか」という問いかけに対する答えの一つは、「君たちに戦争責任はない。だが戦争を繰り返さない責任がある」である。



感想

私は大津の膳所に住んでいるため、今回訪れた渡来人歴史館は大変近くである。そして今まで何度も前の国道を車で走っていたにも関わらず、渡来人歴史館がその場所にあるということを今回訪れるまで知らなかった。講義においては、学生時代に学校の授業で学んだことも多くあったはずなのに、自分の記憶として定着していることはわずかであった。今回のセミナーでは日本と朝鮮の歴史について正しく知りたいという強い思いがあったため、自ら学ぼうという姿勢でセミナーに参加することができたが、今までの自分の無関心さを反省する機会になった。そして、教員として学校現場で歴史の授業をしながら、そこでも今までの自分の無関心さと同じような状況があるのではないかと感じるがあった。講義の中で大澤さんが、「過去に日本が朝鮮にしてきたことは目を瞑りたくなるようなことではあるが、知っておかなければいけない。」と話しておられた。しかし、実際に自分が受けてきた授業や教員になってから行っている授業の中でも、アメリカに原子爆弾を投下された歴史については詳しく学ぶが、日本が朝鮮に対して行ったことについて同じだけ学ぶか

と考えたときに、同じとは言えない。だが、今の小学生を見ていると、自分が小学生だった頃とは韓国に対するイメージが明らかに違うと感じる。それはテレビ番組でKPOPアイドルを見る機会が増えたということもあるだろうが、韓国で流行りのファッションや食べ物をSNSで検索して自ら観たり、自ら韓国語を勉強してSNSでの名前をハングルでの表記にしたり、時には教室で児童から韓国語が聞こえてくることもあったりする。

今回のセミナーに参加し、子どもたちには自ら韓国の文化に親しもうとする姿勢と同じように、日本と韓国の歴史についても正しく知ってほしいと思った。そして展示の説明を聞いた際に、朝鮮通信使と雨森芳洲の話があったが、夏の研修で朝鮮通信使を巡るフィールドワークに参加したこともあり、歴史の授業で朝鮮通信使と雨森芳洲が出てきた際には、実感を持って自らが学んだことも踏まえながら授業をすることができた。だから、今回のセミナーで学んだことも、今とこれからの時代を生きる子どもたちに正しく伝えていきたいと思った。

(寺井 詩織)

《午後》

【訪問先】 滋賀朝鮮初級学校

【講 師】 滋賀朝鮮初級学校前校長 鄭 想根さん
授業見学のと、学校紹介の動画視聴、児童による歌と民族舞踊の発表、鄭先生から在日コリアンの歴史や差別・ヘイトクライム、民族的アイデンティティの継承などについてお話を伺った。



一日のふりかえり

【会場】 ピアザ淡海

【ファシリテーター】 川辺 純子さん (Glocal net Shiga)

最初に、動画「DNAの旅」 (<https://www.youtube.com/watch?v=gTMlnVx-PzQ>) を視聴し、今日一日の学びについてふりかえりを行った。



感想

朝鮮学校に行くと思った時、朝鮮という言葉から最初は率直に怖いという印象がありました。ですが、実際に行ってみると生徒の方達が笑顔で楽しく学校生活を送られているのを見て、日本の小学生とあまり変わらないな。むしろ日本の小学生よりも笑顔が多くみられ、授業にも積極的に参加している姿勢をみて見学している側もとても温かい、親しみやすい気持ちになりました。また、同時に知らないうちに朝鮮という言葉から壁や不安を感じ、日朝韓の関係を判断していた自身にも恥ずかしいなと感じました。メディア等の目に見える情報だけで、議論判断するのではなく実際に自分の目で知り、寄り添うことが大切なのだと改めて考えました。

(平居 ひのわ)

第6回 多文化共生に関する講演および受講生による発表会

【開催日】2024年12月14日（土）

【参加者数】受講生：16人 サポーター：6人 来賓等：12人

【会場】ピアザ淡海

講演 危機の中の「多文化共生」



《講師》元NHKアメリカ総局長 脇田 哲志さん

プロフィール

和歌山県出身。京都大学法学部卒業後、NHKに記者として入局。プリンストン大学国際公共政策大学院客員研究員を経て、1998年から中国総局長、2007年からアメリカ総局長、2011年から国際放送局長を歴任し、長年にわたりNHKの国際報道に携わる。2013年から京都光華女子大学教授、2019年から副学長、2023年より名誉教授に就任。現在、滋賀県在住。外国人に近江の魅力を紹介しようと、「歴史文化遺産ガイド」としての資格も取得した。

講演概要

私は長らく国際ジャーナリストだったので、国際的な観点から見ると多文化共生、海外では移民問題という形で問題が現れるが、かなり危機的な状況が来ているのではないかと思います、今日は改めて皆さんに強い決意を持っていただくために「危機の中の『多文化共生』」という演題にした。

（1）多文化共生とは

①多文化共生を英語で？

「多文化共生」はもう耳慣れた言葉になった。ただ、Google翻訳にかけてみると、「multicultural coexistence」と出てくるが、私はこの英語を海外で見たことがない。一種の「和製英語」ではないか。なぜ「多文化」なのか。なぜ、多民族、共存といった言葉を使わないのだろうか。

②ワールドアミーゴクラブ

このセミナーで、海外ルーツの子どもたちの学習支援をしているボランティア団体「ワールドアミーゴクラブ（WAC）」を訪れ、とても感動した。日本の学校に通う子どもたちを集めて、保護者も一緒に来て交流も生まれていて、帰る時にはお弁当のプレゼントもあり、子ども食堂の役割も果たしていた。

外国人保護者に話を聞くと、サポートのおかげで日本語での教育にも慣れてきている一方で、自国の文化などに触れる機会がなく、だんだん親から離れていくように感じることも話していた。WACは民間だからこそ柔軟で良い取組をされているが、いつまでもこのまま民間の人たちに頼れるものなのか、もう少し行政による制度的な支えなどを各地で作っておく必要がある時代に来ているのではないかと感じた。

③東近江市のモスク

東近江市のモスクも訪れたが、礼拝を見学し、日本のお寺で感じるような感覚を覚えた。インドネシアの技能実習生からは、「日本の友だちができなくて寂しい」「日本人のガールフレンドができない」と、日本人とのつながりを求める声があった。甲賀市から自転車で1時間半かけてお祈りに来ている人に理由を聞くと、ここに来ないとつながりができないからという答えが返ってきた。

このモスクの世話役の話では、やはり地元との関係に最も気を遣うと話していた。うまくいく秘訣は、「日本人の妻の存在」と言っていた。大勢が集まる時には事前に「迷惑はかけませんので」と、必ず町内会長に挨拶に行くことで安心してもらっているとのこと。まさに、「郷に入っては郷に従え」の精

神。地元の人といかに日々うまくやっていくかという難しさがあるようだ。日本にいる外国人は、日本という「他文化」を「強制」されていないだろうかと思ったりもした。

④滋賀朝鮮初級学校

第5回セミナーで訪れた滋賀朝鮮初級学校では、鄭先生から、この学校は正規の学校法人と認められず、国からの補助金を受けられないと聞いた。運営資金をクラウドファンディングで集められたが、その呼びかけ文の中で、他の都道府県とは異なり、滋賀県知事がこの学校を2回訪問し、県独自の援助があることにも触れられ、感謝されておられた。ただ、ここで私たちが考えなければならないことは、学ぶ子どもたちには国籍やルーツなどは関係なく、みな平等に学ぶ権利を「国際人権規約」などで保障されているということ。それらが十分に生かされていない現実にも、今回触れることができた。ある意味、日本の中の多文化共生にも危機にあるのではないか。人々の善意に支えられているというのが、日本の多文化共生の現場だと。しかし、鄭先生が言うように制度の支えが大切だということも、私たちはちゃんと受け止めなくてはならないと思う。

(2)「世界的な」危機の中の「多文化共生」

世界が今どんな状況なのかをこの機会に皆さんに共有したい。

①アメリカ合衆国

オバマ元大統領のとても有名な演説がある。21世紀のさまざまな演説の中のナンバーワンの一つと言われている。



「黒人のアメリカ、白人のアメリカ、ラテン系のアメリカ、アジア系のアメリカもない、あるのは『アメリカ合衆国』だけだ！」

まさに「移民国家アメリカ」の理想を高々と掲げた名演説である。

アメリカ政府の人口統計で、アメリカの人種別構成がどうなるかという予測がある。最新の国勢調査は2020年で、白人が57.8%、中南米にルーツがあるヒスパニックは18.7%だった。2040年代には白人は全体の半数を切ると言われている。2000年には約70%が白人だったが、次の20年後には白人が半数以下になり、ヒスパニックは1/4を超えると。これを見るとやはりオバマ元大統領の言うとおり、「みんなの一つのアメリカなんだ」という理想を掲げないと、うまくやっていけないこともある。まさに多様性が加速しているというのがアメリカの状況である。

しかし、アメリカの多様性がいっそう深まることにストップをかけるかのように登場したのが、トランプ前大統領だ。ハリス副大統領が大統領選挙で負けた大きな原因は、物価高などの現状への不満。しかしそれだけでなく、一部の白人が抱く「少数派に転落することへの不安」に、トランプ氏がうまくつけこんだ点も見逃せない。おもに南の国境を越えてやって来た「不法」移民は1100万人に達する。トランプ氏は、移民が白人の仕事を奪っているとか、麻薬と犯罪を持ち込んでいるとか、ペットの犬や猫を捕まえ食べているとか、根拠のないウソを繰り返し、「不法移民を本国へ強制送還する」と主張した。有権者の反移民感情を掻き立て、自分への支持に結びつけたのだ。

(ニュース映像)「トランプ氏は不法移民の大規模な送還を公約に掲げており、バイデン政権が打ち出した不法移民の救済措置を就任初日に撤廃すると訴えている。」

トランプ氏の移民排斥のニュースが流れる日本のYouTubeには、トランプを賞賛する日本語のコメントが次々と投稿されている。トランプ次期政権に

よって移民の強制送還などが実際に行われることになれば、影響を受けやすい日本でどのようなムードやリアクションが起こってくるか心配だ。これも多文化共生の危機だと考えてほしい。

②ヨーロッパ

（この夏、イギリス各地で起きた大規模な暴動のニュース映像）「発端は7月末に起きた殺人事件。17歳の少年が子どものダンス教室に押し入って次々と人を刺し、子ども3人が死亡した。犯人の少年はイギリス生まれだったが、SNSなどで、犯人はイスラム教徒の移民で、去年ボートでイギリスにわたってきたなど反移民感情をあおる二セ情報が拡散。これにより政府の移民政策への抗議が激しい暴動に発展、イギリス全土の26都市にまで拡大した。その多くが経済的に厳しい状況にあり、移民への不満が高まっていた地域だった。」

二セ情報が、人々を暴動に駆りたてていった。

（ニュース映像）「イギリスで急速に暴動が広がった背景に、アジアやアフリカなどからの移住者が急増したことがあり、そこにはイスラム教徒の割合が高い国も含まれている。経済の低迷やインフレで生活が苦しくなり、移民に仕事を奪われるなどと反発する人が増える中、7月の総選挙では移民排斥を訴える右派政党「リフォームUK」が得票率を大幅に増やした。専門家はこうした主張がSNSなどによって拡散しやすくなっていることも暴動が広がった背景にあると指摘している。」

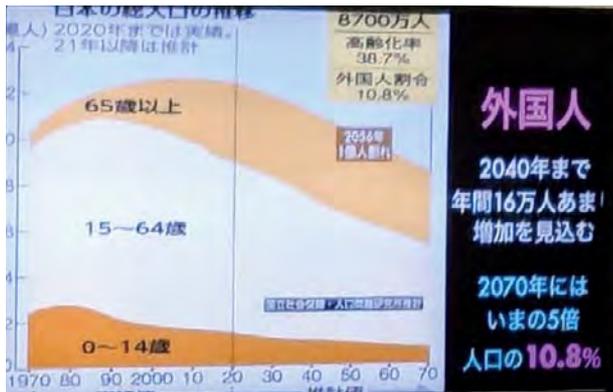
実はヨーロッパ中にこういう傾向が急速に深まっている。フランスやドイツでも移民排斥を訴える政党が大きく勢力を伸ばし、オランダ・ハンガリー・イタリアでは、政権を取っている。移民受け入れに比較的寛容だったヨーロッパが大きく揺れている状況だ。



ヨーロッパでは、多文化共生の問題は、「移民にどう対応するか」「イスラム教徒をどう受け入れるか」という問題に表れてくる。それぞれの文化の独自性を容認するというイギリスのやり方では社会が統合されず、分断が広がった。フランスでは、フランス共和国の伝統的理念に従えば「みんなフランス人」というのが建前だが、フランス固有の文化に馴染めず、それに従わない人が社会から疎外されていく。多文化共生のためにどうすればいいかの模索が続いているが、注目すべきは各国のイスラム教徒の人口比が10%に近づいている中で問題が複雑化していることだ。さらに2050年にかけて、各国でムスリムの人たちの比率がますます高まってくると予測されている。社会がどんなふうになるのか、調和を保って平和にやっていけるのか？ 難民、移民、外国人との共生に答えを見出せないでいるのがヨーロッパの危機的な状況だ。



③日本



そんななか、日本の国立社会保障・人口問題研究所が2023年に発表した人口の予測では、日本はさらに少子高齢化と人口減少が進む一方で、外国人が増加し、2070年には今の5倍の10.8%になるといふ。しかし、いまだかつて日本政府は「移民政策」という言葉を使ったことがなく、移民とどう共生するかという課題に真正面から取り組んでいない。だが、特定技能の人たちに定住を認めるといった事実上の移民政策を始めているので、外国人が今後増えていく。さきほどアメリカやヨーロッパのさまざまな危機的状況を見てきたが、将来の日本で10.8%の外国人たちとどんな社会を作っていきたいのか、みなさんに問いかけたい。私たちは本当に真剣に考えなければならない時代に来ている。

(3) これからの考え方

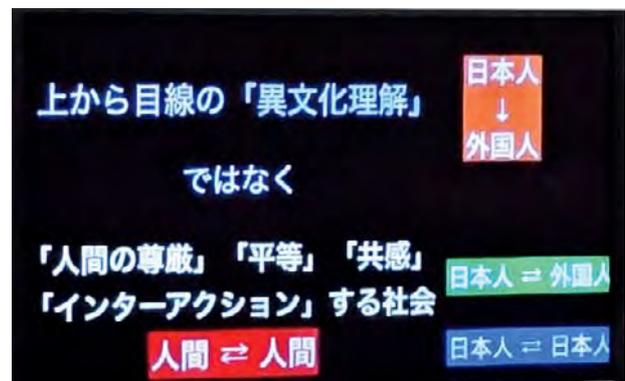
外国人に対する差別感情、日本は二重国籍を認めていないこと、技能実習生への人権侵害の問題、難民の受け入れに冷淡であることなど、日本社会の何がこうしたことを起こしているのか改めて考えてもらいたい。

多文化共生という考え方の真ん中に「異文化理解」という言葉があるが、私は上から目線な言葉だと感じている。日本人を基点に、日本と異なる文化と外国の人たちを理解しようというのは、上から下への視線があるのではないか。

これからは、「人間の尊厳」、お互いそれぞれの人間の尊厳を認め合うこと。「平等」、いろいろな機会を平等に与えること。「共感」、それぞれの立場の人たちの立場に立つてものを考える共感力。そして「イ

ンターアクション」、相互に交じり合う、交流し合うような社会にするのが「多文化共生社会」。実はこれらの考え方は、日本人と外国人の間だけでなく、日本人同士の関係でも同様に必要なことだ。ということは、人間と人間の間を形作る上で一番大切なこと、ということだ。

どんな顔つきの人であろうとその人とどう付き合うか、根本的に大切なことに従って考えなければならない。それは、多文化共生の実現だけでなく、より良い日本と世界をつくっていくことにもつながっていくと思う。



今日は若い方々がたくさんおられるので、どうしても伝えておきたいのは、高い理想と強い決意をこれからも持ち続け、「おかしいことにはおかしい」という勇気を持ってもらいたい。「あらゆる差別は絶対許さない」ということ。そして、ルーツはどうであっても「すべての人の尊厳を尊重し合う」こと。そんな「新しい社会を作っていくんだ」という気概を持って、これからの多文化共生に臨んでいてもらいたい。

感想

セミナーを通して学ばせてもらった学校や団体さんの仕事や熱い思いは、自分も共感することが多くありました。だからこそ、私たちが一緒になって仲間として協力しあうことが必要だと感じた。欧米の不法移民を排斥する動きは、日本でも似たような問題はたくさんある。間違ったことを「それはちがう！」といえる仲間を増やしていくことが私たちの使命だと強く思いました。

(玉井 隆至)

グループ発表

グループ1：「日本で生活する外国人への言葉のサポート・宗教に関する理解を促す」

発表者：雲出、山本、村尾、新谷、平居、クリス



<概要>

役所や学校から届く手紙は、難しい言葉で書かれていることが多いので、やさしい日本語等を活用することで、外国人だけでなく、すべての人にとってわかりやすくなるのではないかと。今の日本の教育システムでは、同じことをすることが正しいという発想が大きくあり、それができない子どもを分けて別の場所で教育している。これは絶対におかしい。インクルーシブ教育が大事。また、どうしても日本社会の中で宗教に対しての偏見が強いように感じるが、心の拠り所を持って生きておられる人たちを私たちは理解すべきだと思うし、お互いに尊敬すべき態度を持つことが大切だと思う。



グループ2：「世界と繋がるワクワクアクション！」

発表者：浅野、福山、南井、奥西、平尾



<概要>

ヘイトクライムに代表されるような強い偏見や差別が根強く残っていることに衝撃を受けたことと、自らの「無知の知」を取り組みの糸口にしようと考えた。まずは大人、特にお年寄りの方々に移民、国に関することに興味を持ってもらえるように老人ホームなどの施設を訪問し、クイズ形式などで楽しんでもらえる形で理解してもらい、帰宅後に家族に話してもらうことで学びの輪が広がるという提案。



グループ3：「移民の方が孤立しないような地域での取り組み&海外で出産をした実際の話」

発表者：中谷和、坂巻、中川、川田



<概要>

移民が孤立しないように、公民館などの施設を日本語教育と友人をつくる場として提供すること、地域のルールやイベント情報等が手に入るチャット機能付きのアプリの作成、外国人保護者のための安心できる居場所づくり、学校での様々な宗教について学び尊重する取り組み、そして、海外での出産経験に基づき日本で出産・育児されている方たちへの心のサポートをすることで恩返ししたいという内容。



グループ4：「視野の広い子どもたちの育成」

発表者：中谷陽、石野、寺井、玉井



<概要>

メンバー全員が教員のため、各自の実践を報告。小学校教員として学校で色々な国に関して正しい知識を持てるような授業の事例として、転入してきた外国人児童に対して周りの子どもたちにタブレットの翻訳機能を活用したコミュニケーションの促しやクイズや世界のあそびを取り入れた視野の広い子どもたちの育成、オンラインを活用し外国人をより身近に感じる機会の提供、国際理解の学習を学校全体に広げたい、人権を語る会で取り組んだ「言葉の壁」を学ぶ実践の紹介。

感想

最初に、脇田さんの講演を経て「多文化共生」という言葉が日本国内でしか使われていないことにとても驚いた。アメリカやオーストラリアなど、幼少期から違う国の子がクラスの中において育ててきているのに反して、日本は島国で小学生の時からほとんどが日本人で構成されているなか成長してきたため海外では使われていないのではないかなと感じた。

移民の人も受け入れて、その土地の人も受け入れて一つの国で生活していくのには全国民の理解とある程度の妥協が互いにないと成立しにくいのだろうと、脇田さんのアメリカで行われた選挙とトランプ大統領による政策のお話しを経て強く感じた。

次に、それぞれのグループのアクションプラン

ではやさしい日本語を活用して移民の方々の生活がより安心して暮らしやすいものになっていく。文字をやさしい日本語に変えることは初歩的だけど移民の方々にとってはとても大きいことだ。また、グループ2の発表ではお年寄りをターゲットとした新しい視点のアクションプランがとても興味深く、より多くの人に理解を得ることのできるアクションプランだと感じた。グループ3では地域のコミュニティセンターを使ったアイデアは地域で移民の人が孤立しないように繋がっていく

と思うし、海外で実際に出産をしたから経験していない人には出てこない視点や、「そういうところで苦労するのか。」など新しく知った事が多かった。最後に小学校の教員が集まったグループ4では実際に授業をして生徒たちにゲーム形式で楽しみながら正しい知識や新しい知識を教えていた。楽しみながら正しい知識が身につくのは一石二鳥で、小学生の頃からこういった知識を持つことはいい機会だと思う。

(中川 穂乃花)



修了証書授与

各グループの代表者に修了証を授与しました。



今年度すべてのセミナーを修了して 受講生の感想

- 今回のセミナーに参加した理由は、いろんな世代の人と関われるんだろうと期待したから。大人になってから学ぶことがなかなかできていなかったので、皆さんと一緒に過ごせた時間がとても自分の中ではかけがえらないものになったなって感じている。
- このつながりがまたつながるとのことだと聞いたので、また自分も参加できるように頑張っていたいと思う。ありがとうございました。
- 自分は普段子どもたちにいろいろなことを教える立場だが、やっぱり自分が知らないと教えることもできないし、改めて大人になって勉強することの大切さを学んで、それを子どもたちにもっと伝えていけたらいいなと思った。
- 留学に一年間行って広がった視野をもう一回広げたいなと思って参加した。いろんな文化とか、いろんな人と出会えて、本当に参加して良かったなと思っているし、大人になるにあたっての進路とか、そういう視野を入れて考えてみたいなって思っている。
- このセミナーを通してすごい成長できたなって感じていて、学校では学べないようなことを学んだし、大人の方たちとこうやって話し合う機会もなかったのが、すごい印象深い思い出になった。
- いろんな人と意見交換していくうちに、いろんな意見があって自分にもめっちゃ刺激になったし、これから人と接するにあたってその経験を生かしていきたいなと思った。
- 様々な国の人と出会ったり、様々な年代の人といろんな話をディベートできたことがとっても楽しかった。この経験を生かして、もし自分の学校にも転校生が来たりしたら、偏見とか差別とかもなくたくさん関わりたいなって思っている。また皆さんとどこかで出会えることを期待している。
- このセミナーに参加するまで、実は滋賀に来たことがなかった。最初もドキドキしながら来たけど、その一歩踏み出すということが大事なんだなと、このセミナーを通じて強く思った。来年から大学で留学生サポーターの代表を務めることになったので、今回の経験を活かして、みんなにもっと情報を共有したり、もっとサポートができるように頑張っていきたいと思う。
- このセミナーには、将来に活かせたらなと勇気を出して応募した。これに参加していなかったら行けなかったような場所とか、知らなかったこととか、出会えなかった方々に出会うことができたので、本当に参加して良かったなと思っている。ここで学んだことを一回知っただけじゃなくて、実際に生かせるように自分の中に落とし込んでいきたいなと思う。
- 留学に行ったので、その経験を生かしたいと思って参加したけど、その経験を活かすプラスいろんなことを知れて、いろんな人に出会えていい経験になった。また今クラスにオーストラリアとドイツからの留学生が来ていて、来月から韓国から3人の女の子が来るので、ここで学んだことを生かして関わっていきたいなって思っている。

●最初大学の掲示板で神戸に行けると書いてあって、それだけの理由ではないが、そういう不純な理由で参加したけど、このセミナーに参加していくうちに、世界のいろんな文化に触れたりとかが僕の中で一番良かった。外国人の方、日本人じゃない方と喋れたのがすごい良かったなって思っていて、ここで喋ったことによって、近所の外国の方と挨拶できるぐらいにはなって関係ができて、なんか良かったかなって思っている。

●このセミナーに参加したのは友達からの勧めで、すごく軽い気持ちだったが、今まで国際交流とかやっていて、でもそれってすごく表面的でまだまだわからない部分がたくさんあったなって。新しいことをここですごく知って、自分の「無知の知」っていうのを感じた。これからただ知っただけじゃなくて、何かしら身近なところからでも行動に起こしていきたいなと思っている。

●神戸に行けるっていうのは最終の決め手だった。あれが終わった瞬間、よし、目標は達成したって思っていた。その後、最後にアクションプランを発表しないとならないということで、本当にヒヤヒヤしながら1ヶ月くらい過ごした。振り返りながら、結局自分がどう変わっていけるかな？っていうところだけかと思った。本当にいろんな機会を計画してもらってありがとうございました。



グループ発表（各グループのスライド）

グループ1

多文化共生 × SDGs × 開発教育

私たちのアクションプラン

- ① 日本で生活する外国人への言葉のサポート
- ② 宗教に関する理解を促す

グループ：雲出、クリストファー、新谷、村尾、山本、平居

「外国人だから…」と勝手に決めつけない

私たちは気になる仕草や見た目の違いから、特定の人にふと目がいてしまうことがありますが、相手がマイノリティの立場にいればいるほど「自分のことをどう思われているのか…」「自分は今、何かのルールを破ったのだろうか…」と不安になられる人も多いことを自覚しておくべきだと思います。

- 「見てはいけない」ではなく、普通に話しかけたらいい。
- 「言葉がわからないかもしれないから」と臆測して避けたり、変に気を使いすぎたりしなくてもいい。
- 知らないことは教えてあげればわかってくれる。

① 日本で生活する外国人への言葉のサポート

1. **まずは日本語で話すことを心がける**
(ポイントはやさしい日本語)
2. **絵や図を見せながらの指さし英会話**
(相手が聞く意思を持っているなら、案外伝わるもの)
3. **ひとりで不安なら、サポートしてくれる仲間を探す**
(分かり合うためのチーム作り)
4. **それでもだめなら翻訳アプリ**
(スマホは有効に使う！)

事例1 あまり頻繁に洗濯してない気がする子に

いつも同じ服を着ている子、場合によっては汚れやにおいが気になることがあったら、「汚いなあ〜」「不潔だなあ〜」と思う前に、ちょっと考えてみよう。

- お気に入りの服なのかな？
- もともとあまり洗濯しない家庭なのかな？
- 洗濯したくてもできないのかな？ (してもらえないのかな？)
- 親はどう思っているのかな？
- 仕方がわからないのなら、教えてあげよう



私にできる外国人への言葉のサポート (山本)

在住外国人から聞いたこと

切符の買い方が分からないなど日常生活で困ったことがあったとき、「そんなこともわからないの？」という反応を日本人からされた。



私のアクション

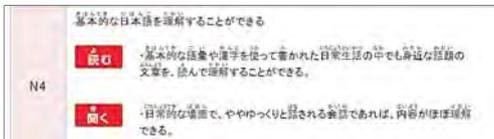
自分たちの常識が全ての人に通用すると思わない。
そばで困っている仕草をしていけば声をかける。
助けを求められたら原則サポートを行う

私にできる外国人への言葉のサポート (新谷)

「様々な掲示物を作る時にやさしい日本語を使用するということにしたい」
技能実習生は日本語検定N4(ひらがなカタカナが分かって、小学生2,3年生の漢字がわかるレベル)があれば日本に来れると聞いて、その状態で日本に住むのはとても大変だろうと感じた。

例：ごみ捨てるルールなど

日本語検定



多様性社会に向けて私ができること (雲出)

多様性社会は「**自分のできる力を持ち寄る社会**」

「何かあったら言ってね」では拾えない声がある

- 当事者自身が「私を聞く」ための環境設定が大切。そのために、まずは自分から話しかけ「私を聞く」ことからスタートしたい。
- 学校の子どもたちと、小さなことでも自分ができることを考える。「社会を変える！」ほどの勇気がなくても、できることがあるんじゃないか。。。

例えば・・・

だれかをバカにしたり外国人の行動を面白おかしく話す人と出くわしたとき、...

- 「おかしい」と思ったことに同調して笑わない。
- 話題をそらす。
- その場を離れる。
- 一緒にその場にいた人の中で笑っていなかった人とつながる。
(仲間を増やす)

②宗教に関する理解を促す

個人として「どの宗教を信じるか」「または信じないことを選択する」のは、この国では誰にも認められている権利です。

それなのに、特定の宗教を信じることによって偏見や差別の目を向けられるのはなぜだろう？

それはおそらく「無知」や「思い込み」からくる恐怖や偏見であり、人は「知らないもの」について恐れる本能がある。

それならば、**正しく知れば分かり合えるはず**。

宗教の自由

個人として「どの宗教を信じるか」「または信じないことを選択する」のは、この国では誰にも認められている権利です。

とはいうものの、特に子どもにとっては生まれた環境に大きく左右されるので、自分で自由に選択なんてできるかな？

「マイノリティーの立場の人が変わるべき」✳

「マジョリティーの側の理解を促すべき」◎

神戸の宗教施設を訪れて（報告）

- 訪れる前と訪れた後での気持ちの変化
- 知らない人へのメッセージ

神戸ムスリムモスクを訪れて



唯一の神「アッラー」
預言者ムハンマド



ジャイナ教寺院を訪れて（雲出）

印象に残ったこと

- 世界平和を追求しておられ、すべての生きているものを食べなかったり、敬虔な信者になると虫などを踏まないために外でも靴を履かなかったりと、想像を超えた生活しておられた。
- 日本社会は彼らにとって生活しにくいかと思っただが、それでも「日本は素晴らしい国」と表現されていた。

私の考え

- 生活様式や食文化の違いがあっても、人として正しく生きておられることを尊重すべき。



シク教寺院を訪れて（クリストファー）

印象に残ったこと

- いろんな宗教があるが、多様に表現されている神は本質的には一つだと信じておられた。しかし彼らは、どれだけ地域社会の行動規範を守っておられるかを知りました。
- シク教の寺院に行く前、この宗教についての何も知りませんでしたが、知れば知るほど世界観が広がり、シク教のことを尊重するようになりました。ランチもいただきました。

私の考え

- 宗教的であってもなくても、誰もが他の宗教の寺院や教会などを訪れてみるべきだと思います。



能登川モスクを訪れて（村尾）

印象に残ったこと

- イスラム教徒の女の子がいたが、学校ではヒジャブをつけていないということ。
- 学校はイスラムの教えに配慮して、その子が豚肉を食べたりしたら、親御さんに謝ったりしてくれること。また、友達も料理に豚肉が入っていたら教えてくれること。
- 小学生も断食はするが、クラブ活動や体育があるときはしないということ。

私の考え

- まだまだ日本は無宗教派が多いが、それぞれの宗教のコミュニティが町内や市内また学校や会社に作られ、誰でも来れる雰囲気になったらいいと思う。
- 宗教の体験を学校でやってみても面白いのではないだろうか。



兵庫マシド ジャンアカデミー

最も重要な柱

「アッラーの他に神はない」

- イスラム教徒の礼拝は1日5回
- 集まっていた人は子どもも含め、生活の中心が「祈り」であるように感じた。
- 女性に対して、ヒジャブを被ることを強制しているわけではない。イスラムの教えが心に収まったときに、その人のタイミングで被るようにしている。



何かを信じるということ

世の中にはいろんな宗教を信じる人がいますが、**共通して言えるのは根本的により良い社会にするため、よりよい人になるために教えを信じておられるのだ**ということがわかりました。

日本社会では宗教に対しての偏見が強いように感じますが、**神様を総合的に捉えるとそれは「Something Great」なのだと思います**。心の拠り所をもって生きておられる人々たちを、私たちは理解し、お互いに尊敬すべき態度をもつことが大切だと思います。

グループ2

多文化共生×SDGs×開発教育
連続セミナー 2024年度受講生

浅野 翔
平尾 太一
福山 太陽
奥西 一生
南井 萌果



発表の流れ

-  学んだこと・印象に残ったこと
-  課題
-  外部データ
-  アクションプラン
-  見込める効果・影響

学んだこと・印象に残ったこと

差別・偏見が未だ根付いている

- ワールドアミーゴクラブさん
- 渡来入歴史館
- 滋賀朝鮮初級学校

無知の知

- ベトナム人親子
- そのような悩みがあることを知らなかった
- 考えたことがなかった
- 他人事だと思っていたけど意外と身近なこと？

課題

- 知る・関わる機会がない！
- 大人の考え方が子どもに大きな影響を与える
→いじめ・差別



Q. あなたは、偏見や差別をなくし、人権を守るためにどのような取組や活動があると思いますか。(当てはまるものを全てを選択)

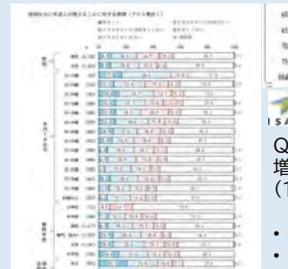


1位:外国人と日本人との交流の場の機会を増やす

国籍や、文化の違いは関係なく、「目の前の人と仲良くなれる」機会を提供したい！

出典 <https://www.moj.go.jp/isa/support/coexistenc/survey03.html>

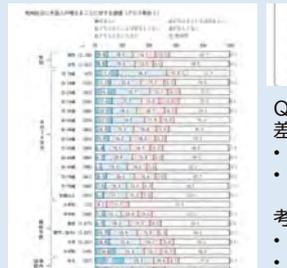
Q. あなたのお住まいの地域に外国人が増えることについてどう思いますか。(1つ選択)



・高齢者は「無回答」の比率が多い
・「好ましい」の回答が少ない

出典 <https://www.moj.go.jp/isa/support/coexistenc/survey03.html>

Q. 日本人から外国人に対する偏見や差別はあると思いますか。(1つ選択)



・高齢者は「無回答」の比率が多い
・「好ましい」の回答が少ない

考察

- 高齢者は無関心の方が多い
- 過激な部分だけがメディアで報道されている→情報が偏っている

出典 <https://www.moj.go.jp/isa/support/coexistence/survey03.html>

世界と繋がるワクワクアクション！

ターゲット	お年寄り	人口が多い・無関心層が多い・時間に余裕があり気軽に参加していただけるのでは？
場所	デイサービス ショッピングセンター	比較的元気な方が多い 平日の昼間など、時間に余裕のある方々に立ち寄っていただきたい
内容	外国人ゲストを呼び、交流を深められる4回連続企画	

- ～世界が認める！美人の言葉大集合～
美人:教養がある人 褒めあったり、その国にしかない美しい言葉の紹介
- ～世界が愛した日本のメロディー～
日本の有名な曲がどの国で流行したのか？みんなで歌う機会も
- ～世界の食材で健康に～
外国で愛されている健康食や、食事習慣の紹介
- ～文化の違いを楽しむ！クイズ大会～
日々の生活習慣や文化の違いを知れるクイズ大会

見込める効果・影響

- ・土産話・家で家族に話していただく
→若い世代にも広まる
- ・関心を持っていただける
- ・他人事だったことを自分事のように捉えられる
- ・お互いに理解を深められる
- ・住みよい地域社会の基盤に



参考文献

- ・株式会社 サーベイリサーチセンター、「外国人との共生に関する意識調査(日本人対象) 報告書」: 出入国在留管理庁.
<https://www.moi.go.jp/isa/content/001416010.pdf>.
(参照2024-11-22)

グループ3

移住された方が
孤立しないように
地域での取り組み

目次

- 01. 移住の方々が抱えている悩み
- 02. 対策1
- 03. 対策2
- 04. まとめ

01. 移住の方々が抱えている悩み

言語、慣れる人、地域のルール、友達

→多民族国家がすでにしている対策を参考に

America, Australia, Canada

・言語教育
・その国の歴史や規則を学ぶ場の提供

02. 対策1

言語教育と友達をつくる場

公民館や地域で使われている言語室などで「日本語教室」を開校

↓

日本語の勉強+仲間もできる

03. マーケティングリサーチの種類

地域コミュニティの意識

移住の方々に地域の規則や地域のイベント情報が行き渡っていないという課題

↓

地域で活用するアプリ作成

[例]アプリ内容

1. 地域のルール
2. 地域のイベント情報
3. チャット機能

・まとめ・

1. 多民族国家がすでにやっている対策を参考に
2. 言語教育やその国の歴史や規則などを学ぶ場を設けていた
3. (対策1) 「日本語教室」
4. (対策2) 「地域活用のアプリ作成」

外国人のママさんたちの居心地の良い居場所づくり
make community
コミュニティ作り

school information, home work, difficult Japanese, いじめられるかも, loneliness, 帰国どうしよう

HAPPY place

Dressing traditional clothes from various nations
さまざまな国の伝統的な衣装を身にまとい

It will serve as an opportunity for cultural exchange through the organization of events in each country
各国でのイベント開催を通じて、文化交流の機会に!

5/1 Valley Festival
すずらんまつり

8/15 Mid-Autumn Festival
中秋節

2/28 lantern festival
ランタンフェスティバル



**プロシードアリーナ
HIKONE**

summary
 ↳Effects anticipated from establishing a space for foreign mothers〜
 ↳外国人ママさん達の居場所を作ることで期待できる効果〜

まとめ
 By establishing a new community, you can cultivate an environment in which you feel secure.

- ①新しいコミュニティを作ることで安心できる居場所が作れる
An opportunity to learn Japanese
- ②日本語の学習の機会の一つに
It presents an opportunity for intercultural exchange.
- ③異文化交流の機会の一つに

日本に住む海外のこどもの学校生活
 JAPANESE SCHOOL LIFE FOR CHILDREN FROM OVERSEAS

まずはじめに...

宗教がおなじ人が集まった学校をつくる

advantage ✖
 ・宗教や言語の問題 ✖

disadvantage ✖
 ・日本人と関わる機会 ↓down
 = 帰国への不安 ↑up
 ex) 日本人との関わり方
 宗教や言語のかべ



大事なこと
 “それぞれの文化、宗教を尊重し共存すること”
 →海外のひとと日本人とおなじ学校に通う

for 海外のひと
 ①日本人と関わる機会をつくる
 ②日本の文化や、関わりかたを学ぶことができる

for 日本人
 ①日本人も海外の人との関わりかたを学ぶことができ
 ②将来、国際社会に協力する人が増える

※具体的な宗教の違いへの学校解決策※
 (about 食べもの)

“アレルギー? 好き嫌い? 学食いい!”

“宗教の理解でたべられない献立が”

solutions
 ①調理の授業で信頼関係や
 “すべての人が食べれる料理の作り方を学ぶ”
 ②適1で食費について学ぶ授業をつくる
 (買った食費をあげて、宗教的にならないようにする)



具体的な宗教の違いへの学校解決策
 (about お祈り)

“お祈りしたいけど行きにくい...”

“動きやすい
きまやすい
迷惑あびたくない”

solution
 ①学校の空き教室を使用許可する
 ②静かな環境をつくる
 ※most important※
 先生・学校が理解し、協力すること

※具体的な宗教の違いへの学校解決策※
 (about 断食)

“みんなの断食前を見るのが辛い”

“断食1人だけ食べていい”

solution
 ①他の教室へ行くことへの許可
 ②午前授業で終わる午前から断食開始ことへの許可
 ③昼食の断食許可(お弁当をとる運動 ↓down)



まとめ

“日本人と海外の人が楽しい学校生活を一緒に送るために”

- ①宗教的食べものへの理解
- ②お祈り時への配慮
- ③断食期への配慮

→ それぞれの違いを尊重・共存

for 海外の人, 日本人

- ①日本人と関わる機会 ↑up
- ②日本の文化や、関わりかたを学ぶ
- ③日本人も海外の人との関わりかたを学ぶ
- ④将来、国際社会に協力する人 ↑up

アルゼンチンでの子育ての経験から学んだこと

平均飛行時間: 約3.5時間

東京(羽田) → アルゼンチン(ブエノスアイレス)




妊娠・出産の際に困ったこと

**ドイツ病院
(大学病院)
Hospital Alemán**

- ・専門用語が分からない (スペイン語)
- ・主治医の指示書が読めない (Aが△とか9が幾文字)
- ・電話で予約 (いつ、どこで、何が必要か)
- ・場所が広すぎて位置関係の把握が難しい





支えてくださった方々

翻訳した単語集 予約履歴スケジュール表

- ・日本人会のコミュニティ (ドイツ病院で出産された・情報提供)
- ・日系の病院の方 (日本語が通じる安心感)
- ・現地で知り合った友人 (多言語でコミュニケーション・寄り添ってくれた)

～お世話になった方々～

- ・日本人学校の事務の方 (日記)
- ・母 (初めての海外で1ヶ月間)
- ・スペイン語の家庭教師の先生 (日本人)
- ・マンションの管理人さん (いつも言語の制限をしてくれる)
- ・買い物と一緒に買った方々 (タラゴ・ドン・コラ・ヨラス・ヨガ・スペイン語)
- ・病院の方々 (細かい心配しや寄り寄り)

日系の病院の方 友人



皆様にサポートしていただいて…

無事に出産することができました。

学んだこと、今の自分にできること

01. 言葉以上に表情や行動、気持ちが伝わりやすいので、温かい贈しや問わりは安心できる要素の一つ
02. 身近な人たちを大切にして相手に寄り添う
03. スペイン語を学び続けてより多くの人たちと関わる
04. 現地で助けてもらった感謝の気持ちを、日本で子育てに困っている方々へ返していく

ありがとうございます!

グループ4

視野の広い 子どもたちの育成

寺井 詩織
玉井 隆至
石野 沙恵
中谷 陽輔

国の名前の由来から
国名を当ててみよう!

1. 「南方にある未知の大陸」

オーストラリア

2. 「わき水」

先住民であるアラワク族の言葉で、わき水や泉などの意味がある「サイマカ」または「ハイマカ」が由来。

ジャマイカ

木と水の土地という言葉に由来する説もある。

3. 日の出る方向

日本

ベガ・ファレタ

- ①まず色付きの竹串を上から落とし、積み重ねるようにする。
- ②重なり合わなかった竹串は上に積み重ねる。
- ③周りの竹串を動かさないように竹串を抜く。
- ④竹串それぞれの色ごとに点数をつけ、合計点を競う。動かしてしまおうと点数減。

ながれ

- ①セミナーを通して感じたこと
- ②子どもたちに伝えたいこと
- ③実践
- ④課題 そのために

感じたこと

セミナーを通して、日本ラチーノ学園・滋賀朝鮮初級学校、ワールドアミーゴクラブをはじめ、滋賀県内で外国にルーツをもつ子どもたちが学ぶ場を実際に訪問できました。

全ての学校、団体の活動はどれも子どもたちのために、活動している熱い思いを感じました。また、その学校や団体がイベントや交流を大切にされていることを知れました。

子どもたちに伝えたいこと

身の回りに、外国にルーツをもつ友だちや大人がいて、自分にも関係のあることだと感じてほしい。(ここからアクション)

↓

滋賀県内に外国にルーツをもつ仲間がたくさんいて、学びの場があることを知ってもらいたい。

↓

各学校や団体での様子を知り、(オンライン)交流できるような機会を作りたい。



実践 ①知っている国教えて!!

○ヨーロッパやアメリカ、ブラジル、日本近隣諸国が回答が上がってきた。

○思い出せる国や地域が出てこなくなり、「世界地図をみたい!」との声が出てきた。

○世界地図をみたが、アフリカやアジア・南米・中東諸国はあまりでてこなかった。

実践 ②滋賀県に住んでいる外国人はどこ国の人が多いのかな?

○上位11カ国のうち6カ国、アメリカ、中国、韓国・朝鮮、ブラジル、タイが出た。

○ベトナム、フィリピン、インドネシア、ペルー、ネパール、ミャンマーは、世界地図を見ても出てこなかったの、子どもたちに残りの6カ国当ててもらった。

ベトナムの人をはじめ、アジアの人が増えていることに驚いている様子だった。

実践 ③じゃんけんってみんな同じなんかな?

○外国語の授業で、アメリカのじゃんけんは知っていた。

○インドネシア・ベトナム・フィリピンを紹介した。

○ブラジルのじゃんけんは聞いて、調べてみた。

○普段、勝敗がつくことが嫌な子どもたちも、いろいろな国のじゃんけんを一緒に楽しめた。

課題

学校現場だけでは、継続的な活動が難しい。

○目の前の子どもたちに伝えることはできるが、発達段階に合わせて、同じ子どもたちに継続的に伝えるシステムがない。

そのため、

- カリキュラムとして継続できるようなシステム化。
- 国際理解を進めたいと思える仲間の輪を広げる。
- 子どもたちを地域での活動などにもつなげていく。

授業の流れ

- ①世界の国あてゲーム
 - ・自分の知っている国のことやその国のイメージを書く。
 - ・一枚の写真から、どこの国かを当てる。
- ②世界の遊びをしよう
 - ・各自調べた遊びをする。
 - ・ふりかえり

日本以外の国のこと

世界を見よう
めあて 日本以外の国についてを学ぶ

知っていることは少ないけど、その国に対するよくないイメージはもっていることも

国	知っていること	イメージ
フランス	パリにあるエッフェル塔	
カナダ	大きな湖、雪	
アメリカ	サムライ、そのあんなに、食べ物	サムライ、そのあんなに、食べ物、サムライ、そのあんなに、食べ物
イタリア	パスタ、ピザ、ワイン	
シンガポール	きれいな国	
中国	中華料理	
インドネシア	ジャババ	
ベトナム	ベトナムライス	

写真から読みとる国のこと



ホット・ポテト (アメリカ) ターラーターラー (ドイツ)



児童のふりかえり

- ・それぞれの国の遊びを知った。
日本と似ている遊びもある。
- ・あいさつは全然違う。
- ・日本とほかの国は似ているところもある。
- ・外国のふつうが日本では、きたないこともある。
- ・その国の文化があるから、マナーが悪いとかはないと思った。
- ・アメリカの遊びを知れてうれしい。知れて想像が広がる。

成果や今後の課題

○遊びを通して、世界の国を知るきっかけとなった。

- ★学年や地域に合わせた教材の準備。
- ★日常に、国際理解について考える場面設定。
- ★外部の活用。

①セミナーを通して学んだこと

多文化共生社会を作る上での4つの壁



- ・ことばの壁
- ・文化の壁
- ・制度の壁
- ・こころの壁

この問題にどう現場でむきあうか

本校児童の実態

湖南省立 岩根小学校



岩根小学校の状況

全校児童172名の小規模校（特別支援5学級）

外国人児童数18名（ブラジル、ペルー、フィリピン、スリランカ、ベトナム国籍）

日本で生まれ育った児童が多いが、家庭内言語が母語のため、日本語習得が十分ではない。
両親の不規則な勤務や失業により、教育に重点をおける家庭が少ない。

日本で生まれ育った子どもが多いが・・・

言葉が伝わらずもやもやする子どもたち・・・
心無い言葉に傷つく生徒指導事案が少なからずある現状・・・
違いを認め合える空気感を作っていきたい・・・



人権を語る会「いいなの日」



2024年夏 JICA海外研修に参加



日系移民の方から学んだことを伝えたい

②人権を語る会 テーマ「言葉の壁」

学習の流れの流れ

①導入「アラビア語の薬について」



②展開「浜田 ケインさんのお話」



③まとめ「困っている人の気持ちを考えるということ」

④話し合う内容「もし日本語がわからない子がクラスにいたときに、自分ならどうするか。」

人権の取り組みに終わりはない。

浜田 ケインさんの経験談から、「誰一人も取り残さない」という考え方を大切にしていきたい。

多文化共生の「国籍や民族などの異なる人々が互いの文化的違いを認め合い、対等な関係を築こうする。」気持ちを持ちたい。

さらに見聞を広め、国際感覚を磨いていきたい。

ご清聴ありがとうございます
ございました！



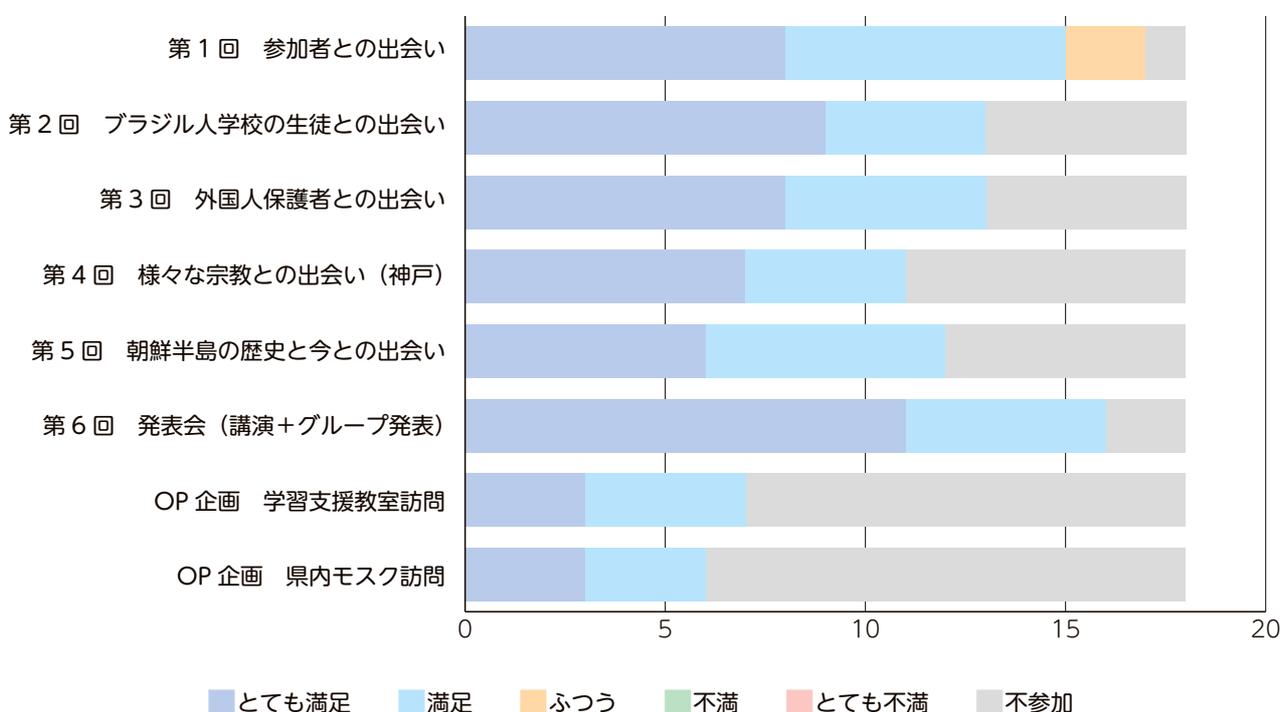
アンケートまとめ

次世代人材育成事業連続セミナー 2024年度 修了生へのアンケート

回答数：修了生18人（うち、高校生5人、大学生6人、社会人7人（現職教員含む））

【連続セミナー全体について】

修了されて改めて、各回セミナーにどのくらい満足されましたか。



一番印象に残っている回は、どの回ですか？その理由は？

- ラチーノです。湖南省の外国籍児童の課題について、色々考えさせられました。外国人学校があるから外国においても保護者も子どもたちも安心して通えるラチーノの取り組みを、教職員の人権学習の研修に是非計画したく思いました。
- ラチーノ学園。移民の話を聞いて、ブラジルも日本も関係なく、ルーツをたどると同じなのかもしれない。とっても不思議な体験をしたから。また、あれだけ輝いて学びに向かっている彼らを見て、素晴らしいと感じた！！
- ブラジル人学校に訪れたのが印象的でした。外国人学校の存在を初めて知った回でした。外国人学校は全然国からの支援を受けられないことに驚きました。
- 外国人保護者の方と話すのはとても貴重でした。これまで日本語を母語としない児童の担任をしたこともなかったので、もし担任となったらどのように支援していけばよいかも不安でした。しかし、

生の声を聞いたことで、学校側が配慮することや教師が気にかけることを知ることができたからです。

●第2回（ブラジル人学校）。学校外で在日外国人が抱える問題について考える機会になったから。またそれ以外のフィールドワークの回に参加できなかったの。

●ラチーノ学院に訪問させて頂いたことが大変印象に残っています。学生さん達と交流させて頂いたことや、家族の話を聞かせて頂いたことももちろんですが、学級にいるブラジル出身の児童も少しの間ラチーノに通っていた時期があるそうで、夏休みにラチーノに見学に行かせてもらって学生さん達と給食を一緒に食べたよとその子に伝えたと、とても嬉しそうにしている、アイス売ってたやろ？と得意げに教えてくれ、売ってたから食べたよ！と言うとさらに嬉しそうにしていたことが私も嬉しかったです。

●宗教との出会い。普段足を踏み入れない寺院やモスクなどにおじゃまさせて頂き、お話を聞くことができたのは貴重な体験でした。

●外国人保護者との出会い。自分自身、旅行者の方々や、子どもとの関わりは、機会があれば関わることができるが、なかなか生活している人と交流する機会はなかったところ。また、自分自身福祉の仕事をしている中で「小さな気遣い」を行っていくことで、人同士が心地よく過ごせる事を作り上げていくことができると思っており、そうした「小さな気遣い」がいくつかあれば、保護者の方の困りごとは減っていくのではないかと感じられた。そうした課題がたくさんあることを気づかせてくれたためです。

●ブラジル人学校の回。この回は他の回とは違って

実際に経験している人から話が聞けたし、友達も作れてとても楽しかった思い出があるから。

●朝鮮学校訪問で、その理由として、そもそもなかなか入れない朝鮮学校に入れたのとすばらしい踊りの発表会が印象的だった。

●第5回（朝鮮半島の歴史と今との出会い）

●第2回ブラジル人学校の生徒との出会い。理由は、多国籍の同年代の人たちと仲良くなれたからです。また、ブラジル人は、陽気だとよく聞きますが、本当に陽気な人が多数で、とても楽しかったからです。そして、私はブラジル人学校の生徒たちより年下でしたが、とても優しく接してくれて嬉しかったからです！

●一番印象に残っているのは、第二回のブラジル人学校の生徒との出会いです。学校全体の雰囲気はブラジルで、掲示物も全てポルトガル語、ブラジル料理で、自分が逆の立場になったことを体感できたからです。ただ、ブラジルの国民性が出ていて温かい雰囲気があったからこそ受容感を感じることができ楽しく過ごせたのだと思います。その生徒達にとって様々な苦労がある中で、周囲の日本人が取る行動や表情がいかに大切かを考える機会となりました。また、生徒たちの生い立ちや胸の内を聞ける貴重な時間となり、相互理解、寄り添う気持ちが多文化共生に繋がっていくのだと強く感じました。

●神戸のモスクめぐりです。

●モスク訪問。理由：第2回に予定があり参加できなくてとても悔しかったけど、そのぶんモスクの方たちとお友達になれたから、このイベントに参加した理由の一つである海外の友達をつくるというのをクリアできてよかったから！

- 第2回がとても印象に残っています。初めて参加した回ということもあったし、歳の近いブラジルにルーツをもつ高校生たちと交流することが出来て、多文化共生について真剣に考える契機になったと感じているから。
- 第四回の様々な宗教との出会いです。普段生活しては、ほぼ絶対に会うことのできないような

方達と会い、どういう考え方で何を信じ目指しているのかというお話を聞くことができ、非常に刺激を受けました。

- 日常では触れることの出来ない宗教を知ることができたので、神戸ツアーが一番印象に残っています。

【セミナーを終えて】

この連続セミナーを受ける前と受けた後では、何か変化はありましたか？

- 今まで知らなかった世界の事実や滋賀県における多文化共生の取り組みを知り、自分にできることは何かを考えるようになりました。今まで自分ごととして国際理解に関して考えられていない部分もありましたが、本気で活動されている方々とお会いし、多様な考え方をいただきました。県の国際教育部会の立場として、県内の教育活動を促進していくためにさらに知識を得たいと思います。セミナーやイベントがありましたら、本研修は終了しましたが、是非お誘い頂ければ幸いです。新しい出会いに感謝です。家族共々、大森さん、森川さんはじめ国際協会の方々、本当にありがとうございました！
- 外国人に対する意識が変わったと思います。セミナーを受ける前はほとんど無関心だったのですが、セミナーを受講してもっと外国人の方と接してみたいと思いました。
- ワールドアミーゴクラブ（学習支援教室）のお手伝いに行ってみたいです。
- 大人になっても学び続けるチャンスを逃さずに、新しい知識を蓄えたら、経験していきたいと思いました。
- 現時点では薄い目的で異文化交流することにとどまっていたが、多文化共生の実現にむけて社会貢献性の高い活動にシフトして取り組みたいと思うようになった。
- セミナーを受ける前から国際交流には興味があり、国際交流パーティーに参加して色々な国出身の外国人の方々と話したりしてはいたのですが、パーティーの場合はその時その場だけで楽しく話して終わりという感じなので、セミナーでは多くの学びを得ることが出来て良かったです。外国からの転入生が来るなら、是非自分の学級に迎え入れたいという気持ちが強まりました。
- 大森さんが仰っていたように、色んなものが目についたり、関心が湧いたり、身近に感じられるようになりました。
- 日本に入る方は、個々に違いがあることが前提だが、“日本人”と関わりたいと思っているため、日本人として日本語は使うが、コミュニケーションの取りやすい表現、“やさしい日本語”を使う事。
- 知らなかったことを知って考え方が変わった。国際的な問題とか移民の人の抱える悩みなどは今まで何も知らなくて、学校で習えないようなことが

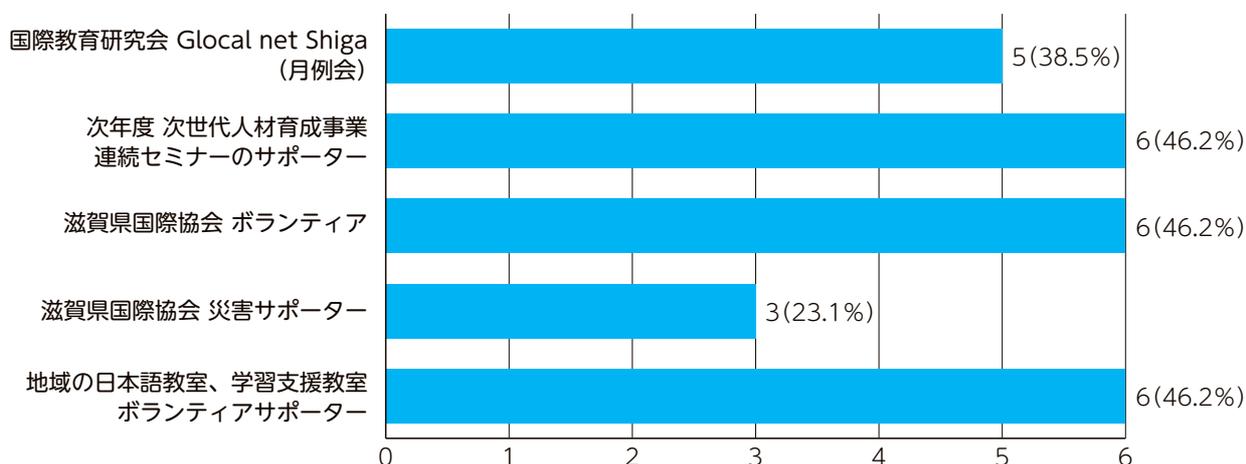
半年間で学ぶことができたことを通して、こうゆう問題を解決していくような仕事に今すごく興味を持つようになりました。

- 積極的に海外の方に話しかけるようになった。
- 仕事柄人権研修の講師をさせていただくことができますが、このセミナーで得た多くの学びを広めていけたらと思います。また、高校生、大学生など若い方の意見が聞けたことも励みになりました。
- 私は、セミナーを受ける前もポジティブでしたが、セミナーを受けてもっともっとポジティブになり、失敗を恐れなくなる心がつきました！
- 様々な宗教のツアーを巡り、実際に礼拝を見たり学びを深めたりしたことでその方々に対する理解が深まりました。魚やお肉は極力減らすことや小さな命を大切に、ご飯を残さないなど、今すぐにも実践できることを子どもたちにも伝え続けたいと思いました。
- これまで一方的な偏見を持っていたところを修正し、多角的、客観的に物事を見極める力がついた気がします。

●いままで海外の人を見かけたら英語で話しかけていたけど、それは相手の人に失礼だと知り、日本語で最初は話しかけるようになった！

- 今までは母が外国籍ということもあって多文化共生ということを身近に感じて自分ごとにできていると思っていたけれど、参加して本当に多種多様な背景を持つ方に出会ったり、学んだりして今までは多文化共生のほんの一面しか知らずに知った気になっていたんだなと思った。日本に暮らす色々な背景を持つ方に対して親しみが増したし、なにか行動したいという思いがとて強くなった。
- セミナーを受ける前は、恥ずかしながら、韓国や朝鮮、中国などに対して薄っすらと差別意識がありました。しかしセミナー受講後、日本と諸外国の歴史を丁寧に学ぶことで、日本は常に正義であったわけではないし、外国からずっとお世話になってきた国なんだと分かりました。差別意識を持ってしまっていた自分の無知を自覚することができました。
- 自分自身も知らないうちに差別をしている時があることの気づき、多様な考え方の立場で考えてみるようになった。

今後、ご自身が参加を希望されるものがあれば教えてください。【複数回答】



今回のセミナー参加をきっかけに、あなたが新たに始めようとしていること等あれば教えてください。

- 勤務校にて国際理解部会の新設、国際理解通信の発行、職員研修の計画、通年で繋がれる外部講師の計画等（思いつくままに書きましたが果たしてできるか…）
- 友人や家族にセミナーで知ったことを伝えていきたいと思いました。
- 地域の学習サポートや、子どもたちへの授業の実践。
- 国際理解の視点を自分のもつクラスだけでなく、校内で広げていきたい。
- まずは地域で参加できそうな団体を調べて検討してみたいと思った。
- やさしい日本語のセミナーで見せて頂いた動画を自分の学級の子も達にも見せました。ラチーノ学院で頂いた給食の写真を見せたり、能登川のモスクに行った話も子ども達にしました。自分の学びを今後も目の前の子ども達に伝えていきたいです。
- 日本語支援
- 国際教育研究会に興味があります。また、子ども達が異文化に触れた時、その機会を活かして身近に感じるような反応を心がけたいと思いました。
- クラスに新しく留学生が来るから、その人たちにやさしい日本語を使って話す。
- 次世代教育セミナーのサポーター
- 教員研修や授業の実践に役立てたい。
- 道端で困っている外国人がいたら、「May I help you?」と助けたいです。また、もし、クラスに、外国からの転校生が来たら、通訳をしたいです！
- JICA海外ボランティア派遣後の自身の進路について、社会福祉士、ソーシャルワーカー的な働き方として、増えてくる外国の人と、日本人、お互いが心地よく過ごしていける社会づくりに、今回の経験を覚えて活かしていきます。
- 学校での新たな企画を提案しようと考えています。
- 街で見かける海外の人にどんどん声をかけていくこと。
- 国際教育研究会への参加。
- 今のところ見つかっていません。
- また機会があれば今回のセミナーに参加してみたいです。

その他、コメントなどありましたらご自由にお書きください。

- 色々な経験をさせて頂きましてありがとうございました。自分一人では絶対に学べなかったことが学べて良かったです。また何かご縁ありましたらよろしくお願いします。
- 校内での研修参加の呼びかけやセミナーなどにも積極的に参加をしない人間でしたが、なんとなくやってみようかなと思応募させてもらってよかったと思います。貴重な体験に加え、学びも多かったです。ありがとうございました。
- 半年間ありがとうございました。

- 体調不良等であまり参加できなかったことが悔しいですが、自身を広められた大きな機会になったこと、感謝しております。ありがとうございました。
- 半年間ありがとうございました！とても良いことばかり学べたし、自分自身の考える力も変わったように感じています。このプログラムに参加できたことをとても嬉しく思います！
- このセミナーに参加していなければ、絶対出会ってなかった人たちと出会えて本当にとってうれしいです。最初はセミナーが半年もあって、期間長いなあと思っていましたが、あっという間にセミナーが終わって、皆さんと会えなくて、ちょっと寂しいです！2024年メンバーで飲み会とかあったら、ぜひ参加したいです！笑 滋賀県国際協会さん達もこのような機会を設けてくださりありがとうございました！スタッフの皆さん全員優しく

て、お話ししていて、とても楽しかったです！もう、感謝してもしきれません！大好きです！皆さんとの一期一会の出会いを大切に、これからも様々なことを楽しんでいきたいと思えます！本当に何から何までありがとうございました！

- 毎回多くの学びを得ることができたこと、感謝しています。講師の方々や参加者同士の交流で様々な価値観に触れることができました。自分自身の理解を深めたり視野を広く持ったりすることでこれから関わる多くの子ども達に多文化共生の大切さを伝えられると思えます。ありがとうございました！
- このセミナーを通して、自分の世界を広げ、どのような問題が今身近にあるのかを知ること、考えることができ、貴重な機会を設けて下さり、ありがとうございました。

来賓等ゲストから発表した受講生たちへの感想など

- みなさんが5回のセミナーを受けたうえでそれぞれ課題を見つけ、その解決に向けて特徴あるアクションプランを作成されたと思う。中には高齢者向けや学校での取り組みなど今後も受講生の方たちがこのセミナーが終わってもそれぞれの地域で、できるような取り組みもあるようなのでぜひ実践して行ってほしいと思った。
- 学校の先生がたくさんおられることは、知りませんでした。学生らと一緒に活動できる素晴らしい機会を提供されている事業だと思いました。グループ発表は、各個人の発表になっていました。せっかくチーム分けされているので、グループで一つの課題に絞った発表をされる方が、時間短縮にもなり、聞いている方にもわかりやすかったと感じます。
- 各グループの発表は、外国人から直接話を聞いたり、施設を見学したりすることによってリアルな問題点を把握されていて良いと思いました。今後はまとめられたアクションを実行して継続的に共生支援に参加されることを期待します。発表は各グループ全員ではなく、代表者が発表するのが良いと思います。また、それにより発表時間の管理もできたであろうと思います。
- 受講者のみなさん、おつかれさまでした。それぞれの受講者が目の前の課題と真摯に向き合い、アクションプランを考えておられたのが印象的でした。実際に行動に移してみると、思うようにいかないことも多々あると思うのですが、そうした経験からも学びを得たり、自身を高める機会ととらえ、時には休み、時には他の誰かのチカラを借りながら、実践を続けていっていただきたいし、私自身もそうありたいと思いました。

次世代人材育成事業連続セミナー 2022・2023年度 修了生へのアンケート

回答数：21人/2022・2023年度修了生 37人

セミナーの受講後に、実際に行動に移したことがあれば教えてください。

2022年度修了生

①2024JICA地球ひろば主催の研修会に参加させて頂いております。

②大学卒業後、社会人となり、滋賀県に住む外国人と接する機会が増えました。仕事上ではありますが、外国人と実際に接し、少しでも手助けができていたのが嬉しいです。

③アメリカの大学に進学し移民政策などを学んでいます。immigrant and refugeeの支援団体で働いていた人から話を聞きました。その人も、何かしたくてもできない、変えられないという自分の無力さに気づき、法律や政策を変えなければいけないと思って、今は行政で働いているという話を聞きました。自分もブラジル人学校に行った時に、ブラジル人学校の中学生には日本の高校への受験資格が与えられていないことに無力さを感じた経験に似ていると思いました。まだ、行動に移すことはできていませんが、人生の先輩として、すでに移民対応などの機関で働いている人から話を聞くことは自分に今できることだと思います。今暮らしている街の移民担当機関で働いている人のお話会に参加して、その人と連絡先を交換できました。うまくいけば、今年2月にこの街の移民に関するワークショップをその人とともに開くことができるので、その時に行動に移せると思います。

④個人で何か行動に移すまではできていません。。。

⑤ドイツに留学をし始めました。移民、女性の不平

等について、コンスタンツ大学というところで勉強しています。今は、勉強で手一杯で、あまり活動に参加できていませんが、現地のウクライナや他の難民の子どもたちと遊ぶ団体に参加していません。自分から何か企画してなどはまだできていないので、子どもたちと遊ぶ中で、日本の文化を紹介しつつ子どもたちと遊ぶ活動ができたらいなと思うようになりました。

⑥前職場で、多文化サロン（在住外国人から学ぶ子ども向け料理教室）等の企画、運営をしました。

⑦中学校の授業で、国際理解教育の実践。実際にワールドフェスタに行ってみたり、外国籍の方が経営されているレストランに食べに行きました〜笑

⑧開発教育や国際理解教育の実践、研修への参加、朝鮮学校の先生方との交流、ラチーノ学院の生徒との繋がり、校内の外国籍児童の実態把握、このセミナーで学んだ日系人についての知識をもとにJICAペルー教師海外研修に参加した、夏の教材体験フェアで講師をさせていただいた、今年度セミナーの一部でファシリテーターをさせていただいた。

⑨ALTとの積極的なコミュニケーション、地域清掃への参加。

⑩○外国にルーツのある子どもたちと音楽を通してつながるワークショップの運営に参加しました。

- 外国にルーツのある子どもたちの夏休み中の学習支援をさせていただきました。
- オンラインで、青年海外協力隊として活動された方のお話を聞き、現地の様子や活動について教えていただきました。
- タイに行き、現地の大学生と交流したり、ムエタイ等の異文化を体験したりしました。

- ⑩在日外国人への支援についてもっと学びたいと思います、大学の卒業研究のテーマとして取り組みました。

2023年度修了生

- ①ワークショップを活用した授業実践、国際教育研究会 Glocal net Shigaへの参加。
- ②日本で行われる主にパラスポーツの国際大会のボランティアを始めました。短期間の滞在がほとんどですが、なるべく日本で心地よく過ごしていたできるように活動しています。
- ③JICA（海外ボランティア）に申し込みました。選考からはもれてしまいましたが。
- ④短期ですが日本語教員として授業を行いました。ただ、在日外国人ではなく日本に研修で来日した方たちへの授業だったので、在日外国人や海外ルーツの方たちとも一緒に勉強する機会があれば…と思っています。
- ⑤日本語教師養成講座を受講し、現在は日本語学校で非常勤講師として働いています。
- ⑥日本語学校で日本語教師のボランティアを始めました。また、インターンでベトナムの日本語学校を再建するためのビジネスプランを考案しました。
- ⑦社内の外国人コミュニティに参加しました。
- ⑧（小さなステップですが、、、）仕事においては、事業活動や判断を行う際の観点として改めて多文化共生の視点を大切に、重きを置くようになりました。私生活では、異文化に対する自分自身の知識を少しでも増やしていこうと、地域の韓国語講座に参加し始めました。また、本当に小さな小さな一歩ですが、身近な家族や友人との会話の中でも、異文化理解や多文化共生に関する話題に触れる機会を増やしました。これまでであれば、「こう言っても共感できないかな、伝わらないかな」と触れてこなかったのですが、セミナー受講後は、例えば、“滋賀県の〇〇の場所は実は朝鮮半島とも関わりがあるんやで”だとか、（特に私の祖母の）「〇〇人だから～～だろう」という偏見に対しては、“国地域で性格や考えを決めつけるのはよくないよ。例えば、△△さんはいい人でしょ。”などと、違う視点が持てるような話をするようになりました。
- ⑨下宿先の京都から、地元高島市の小さな里山集落に帰ってきました。その集落の区長さんに地域の歴史や伝統行事について聞き書きをしたり、限界集落でもあるその場所で何か面白いことをするために、同世代の仲間を募ってフィールドリサーチやミーティングを重ねて話し合ったり、地元の現役中高生が普段出会うことの少ない学校の外にいる地域の大人や大学生と出会える場所づくり（“TAKASHIMA BASE”という名のコミュニティスペース）に関わったりと、去年はそんなことをしました。今年から新たに始めることとしては、今は地元集落の実家に親と住んでいるのですが、今年の春から村にある空き家に一人暮らしして「住みびらき」「村内自立」をしようと考えています。具体的には、普段から家で一人で過ごすことが多かった村のおじいちゃん・おばあちゃんが気軽に立ち寄れて、お茶を飲みながらくつろげる共有スペース、外から訪れてきた人が泊まれるスペースをつくって、家を地域に開いてみたいです。ま

た、新しく始めるボランティアとしては、福祉施設で働かれている外国人ワーカーの子どもたちと遊んだり、勉強を一緒にしたりすることを始めます。

⑩国際交流のイベントに参加し、他国の文化に触れたり、日本に来ている留学生のホームステイの受け入れをしたりして、国際交流を楽しんでいます。また、セミナーでの活動や体験を話し、仕事においても、国際交流・多文化共生などの分野への異動を希望しているところです。

この連続セミナーを受ける前と後では、何か変化はありましたか？

2022年度修了生

①新たなこととして、ご縁があり、神戸の孫文記念館の活動に参加することとなりました。兵庫県は故郷でもあり、震災30年のコンサートにて演奏することが決まっております。

②大学卒業後も、なるべく多文化共生関連のニュース、書籍に目を通すように心がけています。大人になってからも積極的に学ぶという皆さんの姿勢に影響を受けました。

③ラチーノ訪問は3回目でしたが、また新たな発見ができたと思います。多くの生徒が普段は笑顔で過ごしていても、心の奥では悲しみを抱えている生徒がたくさんいることに気づきました。日本の学校でのいじめや差別というものがどれだけ彼らの心に傷を負わせたのかわかり、印象的でした。また、中学生には日本の高校の受験資格がないということを知った時、日本の移民政策が進んでいないと改めて感じた瞬間でした。

④イスラム教に関する知識を得られた事で、理解をして接する事が出来るようになった事です。(職場で)先日もお祈りの時間があるから場所がないかと聞かれた時に、実際目にした様子が頭に浮かび、理解して対応出来るようになったのは、この講座のおかげだと実感しました。実際に各地を訪れさせて頂いた事で、例えばチラシが送られてきたり、問い合わせがあった時に、自分の言葉で伝

えられる事ができるようになりました。私の説明がきちんとできているかはわかりませんが、理解者を増やしていける事は、この講座がなければ意識できなかったと感じています。

⑤滋賀県にいる外国人住人の方についての知識が深まりました。より、移民、難民、マイノリティに関する知識を求めるようになりました。

⑥知らないことを知ることが出来、外国ルーツを持つ方と知り合え文化を理解する一歩となりました。

⑦セミナー受講前と比較して、滋賀県に関係する外国籍の方がこんなにもたくさんいるんだと感ずることができました。実際にその方々にお会いして、生の声を聞くことで、新しい学びがたくさんありました。現在、中学校で勤務していますが、子どもたちと異文化理解・多文化共生社会について考える時間もあります。その際に、伝える質が高まったと思っています。

⑧イスラム教への理解が深まった、朝鮮についての本を読むなど知識を得た、自身に在日ルーツがあることを肯定的に捉えられるようになった、勤務校で朝鮮学校についての授業実践をした、ウズベキスタンへの旅行と絡めて子ども達にイスラム教の話をした、同じ滋賀県にある施設を全く知らなかった！伝えなければもったいないと考えるようになった、開発教育への関心が高まり他のセミナー

にも参加するようになった、滋賀に住む外国人とその子どもをサポートする仕事に興味を湧いた、日本語指導とはどういうものか知ることができた、様々な施設の訪問を通して自分が行っていい場所ではないと決めつけていたことが間違いだったと気づいた、小さなことでもアクションを起こすことに意味があると気づいた。

⑨新しいことを始めようと思えた。他者（若い職員等）から進んで学べるようになった。

⑩セミナーを受ける前は、県内の外国にルーツのある方の状況について漠然と知っている状態でしたが、セミナーで直接お話を伺えたことで、その方の親しみやすい雰囲気を感じたり、より具体的な問題点に触れたりして、もっと知りたいと思うようになりました。

⑪滋賀県にも、様々な国籍・文化を持った人がいることを知ることができました。一口に外国人といっても、日本語のレベルや日本に来た理由などによって感じる困難さが異なるということを知ることができました。

2023年度修了生

①小学校での学習で国際理解や多文化共生に関する視点を持つようになった。

②海外から来られた方が過ごしやすい日本を作りたいと思った。

③「〇〇人」という言葉を使うときに、いい意味で違和感を感じるようになりました。私は日本人であるというよりも、日本文化の中で生活する中で、今の価値観をもつようになったと考えるようになりました。外国の方に対しても、〇〇人ではなく、それぞれの国や土地の文化の中でその人らしさや価値観が重ねられてきたと考えるようになりました。

④日本で暮らす外国人のことを知りたいと思い、ドキュメンタリー番組で在日外国人に関する特集があれば録画し見るようにしています。

⑤変化はありました。

⑥海外に興味を持つようになり、2024年の夏に海外に行きました。

⑦海外により興味を持つようになりました。

⑧2023年度連続セミナーへの参加を経験し、年齢や職業の違う受講生同士でも問題意識や新しい学びを共有できたことは刺激になりました。セミナーの中で得た、「平行線はあってもいい。交わらなくても、そのお互いの存在を否定しないことが多文化共生。」という趣旨の言葉が心に深く残っており、多文化共生に限らず、人生活動においても重要な視点として大切にしています。

⑨連続セミナーを受講してから、海外よりも自分の住む地域に対して関心が大きくなりました。それはこのセミナーで、滋賀県内だけでも様々な文化やバックグラウンドを持つ人が暮らしていると知ったためです。また、連続セミナーを受講していた当時は地元（高島市）を離れて京都に下宿し、国際関係を学び、ずっと海外に興味を持っていましたが、まずは目の前にいる人・足元のまちからちゃんと向き合いたいと思うようになり、大学4年生の春が始まると同時に生まれ育った高島市の人口18人になった小さな集落に帰ってきました。

⑩セミナー受講前から多文化共生や国際交流には興味はありましたが、セミナーを受講することで、理解が深まったとともに、改めて興味関心が強くなりました。セミナーを受講し、知らなかったことが知れたり、頭では分かっていることでも実際の様子を見れたりしたことで、発見や気づきが多

く、学びが深まりました。社会人になると目の前の仕事をこなすことがメインになりがちですが、セミナーでの体験で、より広い視野を持てるようになったことや、国際交流や多文化理解へのアンテナが高まったことがよかったです。私生活の中で、滋賀県内を移動しているときに、セミ

ナーで訪問していた場所の近くを通ると、ここにモスクがあってイスラム教の方たちが地域に受け入れられながら生活されているという話をしたり、ここで日本語教室をされているという話をしたりと、訪問での体験をさせていただいたことで滋賀県内の場所が違う視点で見ることができています。

その他、コメントなどありましたらご自由にお書きください。

- 個人的にはこの事業をどのように計画され、採択後の報告や予算など、事務的な事が知りたいと思いました。
- とても充実したセミナー内容で、大変勉強になりました。ありがとうございました。
- いつも新しい視点や、発見がある企画をして頂き、ありがとうございます。
- 今年度は都合が合わず、セミナー等に参加できませんでしたが、これからも都合をつけてセミナー等に参加したいです。
- 貴重な機会をありがとうございました。趣旨と外れるかもしれませんが、外国人を含めた防災等も学べると良いなと思いました。
- 滋賀県の在日外国人の方たち自身がどこまで日本語教育を希望されているのか…と色々と考える機会がありました。本当に日本語教育を必要としている場に適切に日本語教育の場が届いたら良いな…と願っています。
- これからの時代、異文化理解・多文化共生は欠けてはならない項目だと思います。学びの場の提供、本当にありがとうございました。準備、打ち合わせからと思うと、さぞ大変だと思います。その分、一人でも多くの方がこのセミナーに参加してくれると嬉しいです。一教員として、県の初任者研修の際に大森さんがお話しされる機会がありました。そこで、僕もこのセミナーの存在を知ったので、県の研修会などにも関わる機会があれば良いな—と思います。ありがとうございました！！
- このセミナーを受けて、自分自身の今後のキャリアについて考え、新しい仕事につくことができました。セミナーに参加しなければ、なかなか変えることは出来なかったと思います。セミナーの参加対象より年齢が上だったのですが、思いきって参加して良かったです。もっと幅広くたくさんの方がセミナーに参加されたいの—と思っています。大森さん、本当にお世話になりました。去年一年養成講座の勉強、就活を必死でこなす日々でした。今後は日本語講師としてなんとかやっていきたいと思っています。今後ともよろしく願います。
- 素晴らしいセミナーを企画運営してくださり、ありがとうございます。今後も自分にできることをやっていきたいと思っています。
- 今後もこのような活動を続けてほしいです。
- セミナーを運営してくださったみなさま、本当にありがとうございました。様々な背景を持った方たちに出会い、楽しく学ぶことができました。

●滋賀県にはたくさんの異文化理解・多文化共生を考える素材が受け継がれており、また環境が生まれていると思います。このことを、私自身は学生の時には気付いていませんでしたが、社会人になり日々痛感する次第です。国際協会の役割はますます重要になり、地域社会からの期待も大きいかと思えます。非常に大変なお仕事だと思いますが、このような人材育成・成長の機会もつくってくださることに、心から感謝申し上げます。いつも本当にありがとうございます。

●セミナーに参加していた頃からもう一年も経ってしまうと思うと早いですが、セミナーに参加でき、自身の興味関心があることを学んだり知れたりすることは楽しいことだと改めて感じました。興味関心は途切れていませんので、今後も何らかの形で関わっていただけたいと思っています。助成金の関係で3年間で一旦この事業が終わってしまうのは残念ですが、貴重な体験をさせていただけたセミナーでしたので、継承発展する形で、続けていくことを願っております。なかなか参加はできませんが、セミナーが終わってからも定例会のお知らせなどもいただけて嬉しいです。ありがとうございます。

あ　と　が　き

2022年度から3年にわたって開催したこの次世代育成連続セミナーには、延べ55人が修了した。高校生、大学生、そして社会人と、年代もこれまでの経験や知識もさまざまな若者たちが集い、ともにワークショップを体験し、県内外のさまざまな人々と出会い、意見を交わす中で、互いに学び合うインタラクティブ（相互作用的）な機会となっていたことは、寄せられた感想から見て取ることができる。

また、過去の修了生にも改めて本事業を受けた後の変化について尋ねたところ、現職教員たちは目の前の子どもたちに自らの学びを授業などでフィードバックしていたり、大学生は卒論で多文化共生をテーマに取り上げたり、日々の世界情勢や国内の外国人に関するニュースに目や耳が留まるようになり、留学して移民や難民について学び始めていたり、地域での外国人や多文化に触れる交流会に積極的に参加したり、日本語教育の道に進み始めていたり、それぞれが新たなフィールドで自分たちのペースで前に進んでいるという報告がたくさん届いた。本事業で蒔いた種がしっかりと芽を出し、すくすくと成長していることが実感でき、主催者として大変うれしく思う。

第6回セミナーで講演いただいた脇田氏の話にあったように、アメリカでは新たな大統領の下、国民の分断が激化するのではないかという危惧が聞かれたり、これまで移民や難民の受け入れに好意的であったヨーロッパ各国では移民排斥の動きが活発化していたりと、世界は今、不穏なニュースで溢れている。そして、これから数十年後には、日本で暮らす10人に一人が外国人になると予測される時代に向け、私たち一人ひとりが、これからの日本社会のあるべき姿について、自分事として考えなくてはならないという現実がある。

本セミナーの修了生や関わってくださった方々と一緒に、未来志向の滋賀の姿を描いていくこと、作り上げていくことを期待したい。

さいごに、本セミナー開催にあたり、快く訪問を受け入れてくださった皆様はじめ、サポートしてくださった皆様方に心より御礼申し上げます。

公益財団法人滋賀県国際協会

2024年度 次世代人材育成事業
『多文化共生×SDGs×開発教育』連続セミナー報告書

発行日 令和7年（2025年）2月
発行 公益財団法人滋賀県国際協会
〒520-0801 滋賀県大津市におの浜1-1-20 ピアザ淡海2階
電話 077-526-0931
FAX 077-510-0601
E-mail info@s-i-a.or.jp
URL <https://www.s-i-a.or.jp>
印刷 大津紙業写真印刷株式会社



この事業は、一般財団法人自治体国際化協会の助成により実施されています。

